

增鏡鈔本完

特105

389

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始





特105  
389

光風館編輯所編

增鏡鈔本

東京 光風館藏版



### 例言

一本書は、中學校・高等女學校及び師範學校等の上級用に當つべき教科書として編纂せるものにして、増鏡の各篇に互り、趣味に重きを措きつゝ、その精粹をのみ採りたれど、又決して事實の聯絡に意を用ふることを忘れざりき。

一本書は、諸本を參酌して、原文の誤脱錯簡を校訂すると共に、多少の取捨を行ひ、簡明なる頭註を施し、又便宜上每篇に題名を附せり。

一本書は、句讀を正し、段落を整へ、歌辭・故語及び對話に引用符を附したり。





大正六年二月

編者識す

増鏡解題

増鏡は、後鳥羽天皇より後醍醐天皇まで十五代百五十年間の事を、流暢典雅なる文章を以て記せる假字歴史にして、大鏡と水鏡とを併せて世に三鏡と稱す。嵯峨の清涼寺にて年老いたる尼の物語を記せるさまに作れるは、他の二鏡などと同じやうなれど、篇章を分ちて題號を掲げ、年次を逐うて事實を記せるは、榮華物語などの體裁に倣へるなるべし。かの承久の御企圖、元弘の御恢復及び南北兩統の起伏、西園寺家の榮華、北條氏の跋扈のさまなどは特に意を用ひたるが如く、随つて書中最も味ふべき文字なり。作者に關しては諸説紛々としてそれと定め難けれど、



この書の記事の最終なる正慶二年より程遠からぬ時代の撰な  
るべきは明かなり。

序

如月の中の五日は、鶴の林に薪盡きにし日なれば、かの如來  
二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうて、  
常在靈鷲山（リウキウサン）など心のうちに唱へて拜み奉る。傍にやそぢ  
にもや餘りぬらんと見ゆる尼一人、鳩の杖にかゝりて參れ  
り。とばかりありて、たけく思ひ立ちつれど、いと腰いたく  
て堪へがたし。今宵はこの局にうち休みなん。坊へ行き  
てみあかしの事など言へ。とて具したる若き女房のつきづ  
きしき程なるをばかへしぬめり。釋迦牟尼佛とたびく  
申して、夕日の花やかにさし入りたるを打見やりて、あはれ

鶴の林  
沙羅樹林、即ち釋迦佛入滅の地。  
薪盡きにし  
入滅の義。  
二傳  
唐土に傳り、更に日本に傳りたる義。  
嵯峨の清涼寺  
山城國葛野郡上嵯峨。  
常在靈鷲山  
法華經壽量品の偈の句。  
鳩の杖  
老人の携ふる杖。



にも山の端近く傾きぬめる日影かな。我が身の上のこゝちこそすれ」とてよりゐたるけしき、何となくなまめかしく心あらんかしと見ゆれば、近く寄りて、「いづくより詣で給へるぞ。ありつる人のかへりこん程、御伽せんはいかゞ」などいへば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いとはるけき心ちし侍る、あはれになん」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらん」と問へば、「いさ、よくも我ながら思ひ給へわかれぬほどになん。百とせにもこよなく餘り侍りぬらん。來し方行く先ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは恙なくおはします、なほやんごとなき如來の御光なりかし」などいふも古代にみやびやかに、年のほどなど聞くもめづらしき心ちして、かゝる人こそ昔

雲林院  
山城國葛野  
郡。  
假名の日本  
紀  
大鏡  
世繼が云々  
今鏡

物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつゝ、「昔の事の聞かまほしきまゝに、年のつもりたらん人もがなと思ひ給ふるに、うれしきわざかな、少しのたまはせよ。おのづから古き歌など書きたるものゝ片はし見るだに、その世に逢へる心ちするぞかし」といへば、すげみたる口うちほゝゑみて、「いかでか聞えん。若かりし世に見聞き侍りしことは、こゝらの年頃にぬば玉の夢ばかりだになく、おぼゝれて何のわきまへか侍らん」とはいひながら、けしうはあらず、あへなんと思へる氣色なれば、いよゝいひはやして、「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ、假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひしつくも髪の話も、人のもてあつかひぐさになれるは、御ありさま



四十帖の草紙  
榮華物語。

のやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへなどすかせば、さは心得べかめれど、いよ／＼口すげみがちにて、そのかみは、げに人の齡もたかく、きもつよかりければ、それに随ひてたましひもあきらかにてや、しか聞えつくしけん。あさましき身はいたづらなる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、ましていと怪しき僻事どもにこそは侍らめ。そもさやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ」といふ。「いさ、たゞおろ／＼見及びしものどもは、水鏡といふにや。神武天皇の御代よりいとあら／＼かに記せり。その次には大鏡、文徳のいにしへより後一條の御門まで侍りしにや。又世繼とか四十帖の草紙にぞ、延喜より堀河の先帝までは少

彌世繼  
今傳はらず。

しこまやかなる。又なにがしの大臣の書き給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は隆信朝臣の後鳥羽院の御位の御程までを記したりとぞ見え侍りし。その後のことなん、いと覺束なくなりける。おぼえ給へらむ所々までものたまへ。今宵誰も御伽せん。かゝる人に逢ひ奉れるも、しかるべき御契あらんものぞ」など語らへば、そのかみの事はいみじうたど／＼しけれど、誠に事のつゞきを聞えざらんも、覺束なかるべければ、たえ／＼に少しなん。僻事ども多からんかし。そはさしなほし給へ。いとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かの古き事どもには、なぞらへ給ふまじうなん」とて、



おろかなる心や見えん、ます鏡

ふるき姿にたちはおよばで。

とわな、かし出でたるもにくからず、いと古代なり。「さらば今のたまはむ事をも又書き記して、かの昔の面影にひとしからむところは思すめれ」といらへて、

今もまた昔をかけばます鏡

ふりぬる代々の跡にかさねん。

# 増鏡鈔本

## 目次

### 一 おどろのした

長田のいね	一頁
嶺のわか松	五
野邊のみどり	八
あまの釣舟	九

### 二 新島もり

銀杏の落葉	三
我が身の宿世	七



我が涙……………二  
村雨の露……………二五

三 ふぢ衣

八重むぐら……………三三  
ありし別……………三六  
磯のくさ……………三七

四 三神山

椿葉の影……………四二

五 内野の雪

千代のみち……………四八

六 煙の末々

あさましの火……………五〇  
峯の秋風……………五三  
菊紅葉……………五三

七 おりゐる雲

藤なみの影……………五五

八 山のもみぢ葉

和歌の浦……………五七

九 北野の雪

枯野の眞葛……………五八  
秋の雨……………六〇



一〇 あすか川

峰のもみぢ葉……………六三

一一 草まくら

うるほふ袖……………六五

一二 老のなみ

花の白雪……………六九

かみ風……………七三

一三 今日の日影

窓のほたる……………七五

一四 つげの小櫛

秋ぎりの空……………七六  
つたもみぢ……………七九

一五 うら千鳥

むなしき名……………八四

一六 秋のみ山

かたぶく月……………八六

一七 春のわかれ

いかならん時……………九〇

一八 むら時雨

闇のうつゝ……………九三



ありあけの月……………六  
思はぬ山の紅葉……………九

一九 久米のさら山

この宿……………一〇五  
水の泡……………一〇八  
花のこずえ……………一一〇  
あられの音……………一一三

二〇 月草の花

なぎさの水……………一二七  
かへる波……………一三三

目次終

増鏡鈔本

一 おどろのした

一 長田のいね

みかどはじまり給ひてより八十二代にあたりて、後鳥羽院と申すおはしましき。御諱は尊成たかひろ、これは高倉院第四の御子、御母は七條院と申しき。修理大夫信隆のぬしのむすめなり。治承四年七月十五日に生れさせ給ふ。

その年の春の頃、建禮門院后宮と聞えし御腹の第一の御子、安徳天皇三つになり給ふに位を譲りて、みかどはおり給ひにし

七條院  
藤原殖子。  
建禮門院  
高倉天皇の中  
宮平徳子。清  
盛の女。  
みかど  
高倉天皇。

一 おどろのした



院

高倉天皇。

新帝

安徳天皇。

三の宮

守貞親王。

故院

高倉天皇。

かば、平家の一ぞうのみ愈、時の花をかざしそへて花やかなりし世なれば、けちえんにももてなされ給はず、またの年養和元年正月十四日に院さへかくれさせ給ひにしかば、いよ位などの御望あるべくもおはしまさゞりしを、かの新帝平家の人々にひかされて、遙なる西の海にさすらへ給ひにし後、後白河法皇御孫の宮たちわたし聞えて見奉り給ふ時、三の宮を次第のまゝにと思されけるに、法皇をいといたう嫌ひ奉りて泣き給ひければ、「あなむづかし」とてゐてはなち給ひて、「四の宮こゝにいます」と宣ふに、やがて御膝の上を抱かれ奉りて、いとむつまじげなる御氣色なれば、「これこそ誠のうまごにおましけれ。故院のちごおひにもまみなどおぼえたまへり。いとらうたし」とて、壽永二年八月二十日

御年四にて位に即かせたまひけり。

かくてこの帝、元暦元年七月二十八日御即位、そのほどのこ



(藏宮瀬無水國津攝)皇天羽鳥後

長田村  
天田郡下六人  
部に屬す。

會なり。主基がたの御屏風の歌、兼光の中納言といふ人、丹波國長田村とかやを、



神代より今日のためとや八束穂に

長田の稻のしなひそめけむ。

帝いとおよすげてかしくおはしませば、法皇もいみじう  
うつくしと思さる。文治二年十二月一日御書始せさせ給

宸筆

年ことのはる  
のわかれをあ  
はれとも人に  
をくるゝひと  
そしりける

あまねき御  
うつくしび

古今集序に  
「あまねき御う  
つくしびの浪  
八島の外まで  
流れ、ひろき  
御恵の陰筑波  
山の麓よりし  
げくおはしま

後鳥羽天皇宸筆  
(古畫備考に據る)

ふ。御年七つなり。建久元年正月三日、御年十一にて御元  
服し給ふ。同じき三年三月十三日に法皇かくれさせ給ひ  
し後は、帝ひとへに世をしろしめして、四方の海波靜かに吹  
く風も枝を鳴さず、世治り民安くして、あまねき御うつくし

びの浪秋津島の外まで流れ、しげき御恵筑波山のかげより  
も深し。よろづの道々にあきらけくおはしませば、國にざ  
えある人多く、昔に恥ぢぬ御代にぞありける。中にも敷島  
の道なんすぐれさせ給ひける。御歌數知らず人の口にあ  
る中にも、

奥山のおどろの下も踏分けて、

道ある世ぞと人に知らせん。

と侍るこそ、まつりごと大事と思されけるほどしるく聞え  
て、いといみじくやむごと、なくは侍れ。

### 二 嶺のわか松

建久九年正月十一日、第一の御子土御院四つになり給ふに御



位ゆづり申させ給ひており給ふ。御年十九。位におはしますこと十五年なりき。今日明日二十ばかりの御齡にて、いとまだしかるべき御事なれども、よろづ處せき御有様よりはなかくやすらかに、御幸など御心のまゝならんとにや。世をしろしめす事は今もかはらねば、いとめでたし。鳥羽殿、白河殿なども修理せさせ給ひて、常に渡りすませ給へど、なほ又水無瀬といふ處にえもいはずおもしろき院づくりして、しばしば通ひおはしましつゝ、春秋の花紅葉につけても御心ゆくかぎり、世をひかして遊をのみぞし給ふ處がらもはるくと川に臨める眺望、いとおもしろくなん。元久の頃詩に歌を合せられしにも、とりわきてこそは、見渡せば山もと霞む水無瀬川、

鳥羽殿  
山城國紀伊郡  
白河殿  
山城國愛宕郡  
水無瀬  
攝津國三島郡  
島本村大字廣瀬

ゆふべは秋となに思ひけん。

萱葺の廊渡殿など、はるくと艶にをかしうせさせ給へり。御前の山より瀧落されたる石のたゞずまひ、苔深きみやま木に枝さしかはしたる庭の小松も、げにく千代をこめたる霞の洞なり。前栽つくろはせ給へる頃、人々あまた召して御遊などありける後、定家の中納言いまだ下臈なりける時に奉られける、

あり經けんもとの千年にふりもせで、

わが君ちぎるみねのわか松。

君が代にせき入るゝ庭を行く水の

岩こそ數は千代も見えけり。



三 野邊のみどり

失せにし人  
右京大夫源師  
光。  
千五百番の  
歌合  
建仁元年後鳥  
羽院をはじめ  
當時一流の歌  
人三十人の歌  
各百首を番へ  
その中十人を  
判者とし、優  
劣を判せしめ  
たるもの。院  
御自身も歌を  
もて秋の二三  
の巻を判せさ  
せ給へり。

上のその道を得給へれば、下もおのづから時を知るならひ  
にや、男も女もこの御代にあたりてよき歌よみ多く聞え侍  
りし中に、宮内卿といひしは、村上の御門の御後に俊房の左  
の大臣と聞えし人の御末なれば、はやうはあて人なれど、つ  
かさあさくて打續き四位ばかりにて失せにし人の子なり。  
まだいと若き齡にてそこひもなく深き心ばへをのみ詠み  
しこそ、いとありがたく侍りけれ。この千五百番の歌合の  
時、院の上宣ふやう、「こたみは皆世にゆりたるふるき道のも  
のどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども、けしうはあ  
らずと見ゆめればなん。かまへてまるが面おこすばかり  
よき歌つかうまつれ」と仰せらるゝに、おもて打赤めて涙ぐ

目に見えぬ  
鬼神  
古今集序に  
「力をもいれず  
して天地を動  
かし、目に見  
えぬ鬼神をも  
あはれと思は  
せ」

みて候ひけるけしき、かぎりなきすきの程もあはれにぞ見  
えける。さてその御百首の歌いづれもとりとゝなる中に、  
薄く濃き野邊の緑の若草に

あとまで見ゆる雪のむらぎえ。

草の緑の濃き薄き色にて、去年のふる雪の遅く疾く消えけ  
るほどを推しはかりたる心ばへなど、まだしからん人はい  
と思ひ寄り難くや。この人年つもるまであらましかば、げ  
にかばかり目に見えぬ鬼神をも動しなましに、若くて失  
せにし、いとほしく、あたらしくなん。

四 あまの釣舟

また清撰の御歌合とて、かぎりなくみが、せ給ひしも、水無



瀬殿にての事なりしにや。當座の衆議判なれば、人々のこ  
こちいと々おき所なかりけんかし。建保二年長月の頃勝  
れたるかぎり抜き出で給ふめりしかば、いづれかおろかな  
らん。中にもいみじかりしことは、第七番に左院の御歌、  
あかしがた浦路はれゆく朝風に

霧に漕ぎ入るあまのつり舟、

とありしに、北面の中に藤原秀能とて、年比もこの道にゆり  
たるすきものなれば、召し加へらるゝこと常の事なれど、や  
むごとなき人々の歌だにも、あるは一首・二首・三首には過ぎ  
ざりしに、この秀能九首まで召されて、しかも院の御かたて  
にまゐれり。さてありつる蟹の釣舟の御歌の右に、  
契りおきし山の木の葉の下紅葉

そめしころもに秋風ぞ吹く。

昔の躬恆が  
醍醐天皇躬恆  
を御階の下に  
召して、目を  
弓張といふ心  
をつからまつ  
れと仰ありし  
に、照る月を  
弓張としもい  
ふ事は山べを  
さしていれば  
なりけり。と  
奏して、大桂  
を賜はりしと  
大鏡に見ゆ。  
魚袋の歌  
吹く風に氷と  
けたる池のう  
をは千代まで  
松のかげにか  
くれん。  
吉水の僧正  
慈圓。吉水は  
山城國愛宕郡  
大谷の別名。

と詠めりしは、その身の上にとりて、永き世のめいぼく何か  
はあらんとぞ聞き侍りし。昔の躬恆が御階のもとに召さ  
れて、弓張としもいふことは、と奏して、御衣賜はりしをこそ、  
いみじき事には言ひ傳ふめれ。また貫之が家に、師輔の大  
臣、魚袋の歌の返しとぶらひにおはしたりしをも、道の高名  
とこそ世繼には書き侍れ。近き頃は西行法師ぞ北面の  
ものにて、世にいみじき歌の聖なめりしが、今の代の秀能は、  
ほとく古きにも立ち勝りてや侍らん。この度の御歌合  
大方いづれとなくうちみだして、勝れたる限をえり出でさ  
せ給ひしかば、おのくむらくにぞ侍りける。吉水の僧  
正と聞えし、またたぐひなき歌の聖にていましき。それだ



に四首ぞ入り給ひにける。さのみは事長ければもらしぬ。

二 新島もり

一 銀杏の落葉

新院の御位のはじめつかた、正治元年正月、頼朝はあづまにて頭おろして、同じき十三日、年五十三にてかくれにけり。治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりや過ぎぬらん。北方は、さきに聞えつる北條四郎時政が女なり。その腹にをのこ二人あり。太郎をば頼家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれて後、兄はやがて立ち繼ぎて、建仁元年六月二十二日、從二位、同日將軍の宣旨を賜はる。又の

新院  
土御門上皇。

年左衛門督になさる。かゝれども、少しおちぬ心ばへなどありて、やうく兵ども背きくゝにぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將のありし時より私の後見なりしを、まいて今はうまごの世なれば、いよく身重く勢そふこと限なくて、うけばりたるさまなり。子二人あり。太郎は宗時、次郎は義時といへり。次郎は心も猛く魂まされる者にて、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に付き従ひて、思ひ構ふる事などもありけり。督は日にそへて人にもそむけられ行くに、いとみじき病をさへして、建仁三年九月十六日、年二十二にて頭おろす。世の中のこと多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口惜しかりけめ。をさなき子の一萬といふにぞ世をば譲りけれ



修善寺  
田方郡修善寺村。

ど、うけひく者なし。入道はかの病つくろはんとして、鎌倉より伊豆國へいでゆあびに越えたりける程に、かしこの修善寺といふ處にて遂に討たれぬ。一萬もやがて失はれけり。これは實朝と義時と一つ心にてたばかりけるなるべし。

筆蹟

君がため神の  
めくみのあつ  
さゆみ矢をよ  
ろつ世のすゑ  
もたのもし。

君のきんせいのつらきあはれ  
矢をよろつ世のすゑもたのもし

源實朝筆蹟  
(赤松香雨藏)

閑院の内裏  
京都二條の南  
西洞院の西一  
町にありき。

さて今は偏に實朝故大將の跡をうけつぎて、つかさ位滞ることなく、よろづ心のまゝなり。建保元年二月二十二日正二位せしは、閑院の内裏造れる賞とぞ聞き侍りし。同じき六年權大納言になりて、左大將を兼ねたり。左馬のつかさ

をぞつけられける。その年やがて内大臣になりても、猶大將もとのまゝなり。父にもやゝ立ち勝りていみじかりき。この大臣は大方心ばへうるはしく、猛くも優しくもよろづめやすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き従ふさま、父にも超えたり。いかなる時にかありけん、

山はさけ海はあせなむ世なりとも、

君にふた心わがあらめやも。

とぞ詠みける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞあとを継ぎける。故左衛門督の子にて、公曉といふ大徳あり、親の討たれにしことをいかでかやすき心あらん、いかならん時にかとのみ思ひわたるに、この内大臣また右大臣にあがりて、大饗など



尊者  
大饗の時に招  
く首席の客。

珍しくあづまにて行ふ。京より尊者を始め上達部殿上人  
多くとぶらひいましけり。さて鎌倉に移し奉れる八幡の  
御社に神拜にまうづる、いといかめしき響なれば、國々の武  
士はさらにもいはず、都の人々も扈從しけり。たち騒ぎの  
のしる者、見る人も多かるなかに、かの大徳打紛れて女のま  
ねをして、白き薄衣ひきをり、大臣の車よりおるゝ程をさし  
のぞくやうにぞ見えける。あやまたず首を打落しぬ。そ  
の程のとよみ、いみじさ思ひやりぬべし。かくいふは承久  
元年正月二十七日なり。そこらつどひ集れるものども、た  
だあきれたるより外のことなし。京にも聞召しおどろく。  
世の中火をけちたるさまなり。扈從に西園寺の宰相中將  
實氏も下り給ひき。さならぬ人々も、泣くく袖をしぼり

てぞ上りける。

二 我が身の宿世

院  
後鳥羽院法  
皇。  
あづまの代  
官  
京都守護。

さても院の思し構ふる事、忍ぶとすれどやうく漏れ聞え  
て、東さまにもその心づかひすべかめり。あづまの代官に  
て伊賀の判官光季といふものあり。かつくかれを御か  
うじのよし仰せらるれば、御方に參るつはものども押寄せ  
たるに、遁るべきやうなくて腹切りてけり。まづいとめで  
たしとぞ院は思召しける。あづまにもいみじうあわて騒  
ぐ。「さるべくて身の失すべき時にこそあなれ」と思ふもの  
から、討手の攻め來りなん時に、はかなきさまにて屍を曝さ  
じ。おほやけと聞ゆとも、みづからし給ふ事ならねば、且は



我が身の宿世をも見るばかり」と思ひなりて、弟の時房と泰時といふ一男と二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。

泰時を前にすゑて言ふやう、「おのれをこの度都に参らする事は、思ふ所多し。本意の如く清きしにをすべし。人にうしろを見えなんには、親の顔また見るべからず。今を限と思へ。賤しけれども、義時君の御爲に後めたき心やはある。されば横ざまの死をせん事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれ打勝つものならば、再びこの足柄箱根山は越ゆべし」など、泣くく言ひ聞かす。「まことにしかなり。また親の顔拜まん事もいと危し」と思ひて、泰時も鎧の袖を絞る。かたみに今や限とあはれに心細げなり。

かくて打出でぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時只一人鞭を上げて馳せ來たり。父胸うちさわぎて「いかに」と問ふに、「軍のあるべきやう、大方のおきてなどをば仰の如くその心を得侍りぬ。もし道のほとりにも、圖らざるに、辱く鳳輦を先だて、御旗をあげられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに参りあへらば、その時の進退いかゞ侍るべからん。この一事を尋ね申さんとて、一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかり打案じて、「賢くも問へるをのこかな。その事なり。正に君の御輿に向ひて弓を引くことは、いかゞあらん。さばかりの時は、兜をぬぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申し、て身を任せ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましなから、軍兵を賜はせば、命を棄て、千人が一人になるまでも



義朝

賴朝

能保室

良經室

道家

賴經

公經室

道家室

御うまご  
將軍賴經。

七條院

後鳥羽院の御

母皇子。

修明門院

順徳院の御母

重子。

顯密

顯は天台宗、  
密は眞言宗。

戦ふべし」と言ひも果てぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、ものゝふども召しつどへ、  
宇治・勢多の橋も引かせて、かたきを防ぐべき用意心ことな  
り。公經の大將一人のみなん、御うまごのこともさる事に  
て、北方、一條中納言能保といふ人の女なり、その母北方は故  
大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さ  
しいらへもせず、院の御心の輕きことゝあぶながり給ふ。

七條院の御ゆかりの殿ばら坊門大納言忠信・尾張中將清經・  
中御門大納言宗家、また修明門院の御はらからの甲斐宰相  
中將範茂など、つぎ々數多聞ゆれど、さのみは記し難し。  
軍にまじり立つ人々、此の外の上達部にも殿上人にも數多  
ありき。御修法ども數知らず行はる。やむごとなき顯密

中院  
土御門上皇。

新院  
順徳上皇。

の高僧も、かゝる時こそたのもしきわざならめ。おのゝ  
心を致してつかうまつる。御みづからもいみじう念ぜさ  
せ給ふ。中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出で、  
こそものし給はねど、世のいと心やましきまゝに、かやうの  
御騒にも殊にまじらせ給はざめり。新院は同じ御心にて、  
よろづ軍の事などもおきて仰せられたり。

三 我が涙

いつの年よりも五月雨晴間なくて、富士川・天龍などえもい  
はず漲りさわぎで、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻め  
のぼる武者ども、あやしく惱めり。かゝれども遂に都に  
近づくよし聞ゆれば、君の御武者も出立つ。その勢六萬餘



六月十日あ  
まり

承久三年六月  
十五日。

本院  
後鳥羽法皇。

騎とかや。宇治勢多へ分ち遣す。世の中ひゞきのゝしる  
様、言の葉も及ばず、まねび難し。あるは深き山へ逃げこも  
り、遠き世界に落ちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。  
「いかゞあらん」と君も御心亂れて思し惑ふ。かねては猛く  
見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわたゞし  
く色を失ひたる様ども、たのもしげなし。六月十日あまり  
にや、いくばくの戦だになくて、遂に御方の軍敗れぬ。荒磯  
に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬ  
れば、いはん方なくあきれて、上下たゞ物にぞあたり惑ふ。  
あづまよりいひおこするまゝに、かの二人の大將軍はから  
ひおきてつゝ、保元の例にや、院の上、都の外に遷し奉るべし  
と聞ゆれば、女院・宮々、所々におぼし惑ふ事さらなり。本院

ものにもが  
なや

とりかへすも  
のにもがなや  
世の中をあり  
しながらのわ  
が身と思は  
む。

信實朝臣

藤原氏、似繪  
を以て著る。

は隱岐國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ綱代車のあ  
やしげなるにて、七月六日入らせ給ふ。今日をかぎりの御  
ありき、あさましうあはれなり。「ものにもがなや」と思さる  
るもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に  
一二やあまらせ給ふらん。まだいとほしかるべき御程な  
り。信實朝臣召して御姿うつしかゝせらる。七條院へ奉  
らせ給はんとなり。かくて同じき十三日に御船にたてま  
つりて、遙なる浪路を凌ぎおはします御心ち、この世の同じ  
御身とおぼされず。いみじう、いかなりける世々の報に  
かとうらめし。新院も佐渡國に遷らせ給ふ。  
まことや、七月九日、帝をもおろし奉りき。この卯月かとよ、  
御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。七十餘日にて



四十五日と  
かや  
秦の子嬰。

おり給へるためしも、これやはじめなるらん。唐土にぞ、四十五日とかや位におはする例ありけりとぞ、からの書讀みし人の言ひし心ちする、それもかやうの亂やありけん。さて上達部・殿上人、それより下はた残りなく、この事にふれにしたぐひは、重く軽く罪にあたる様いみじげなり。

若宮  
後嵯峨天皇。

觀通  
通宗  
通子  
定通  
通方  
承明門院  
在子(土御門天)

中院ははじめよりしろしめさぬ事なれば、あづまにも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にてあらん事いとおそれありと思されて、御心もてその年閏十月十日土佐國の幡多といふ處に渡らせ給ひぬ。去年の如月ばかりにや、若宮いでき給へり。承明門院の御せうとに通宗の宰相中將とて、若くて失せ給ひにし人のむすめの御腹なり。やがてかの宰相の弟に通方といふ人の家にとゞめ

奉り給ひて、近くさぶらひける北面の下藤一人、召次などばかりぞ御供つかうまつりける。いとあやしき御手輿にて下らせ給ふ。道すがら雪かきくらし、風吹き荒れ、ふゞきして、來し方行くさきも見えず、いと堪へ難きに御袖もいたく凍りて、わりなき事多かるに、

うき世にはかゝれとてこそ生れけめ、  
ことわり知らぬ我が涙かな。

「せめて近きほどに」とあづまより奏したりければ、後には阿波國にうつらせ給ひにき。

#### 四 村雨の露

四つにて位に即き給ひて、十五年おはしましき。おり給ひ



津の國のこやの

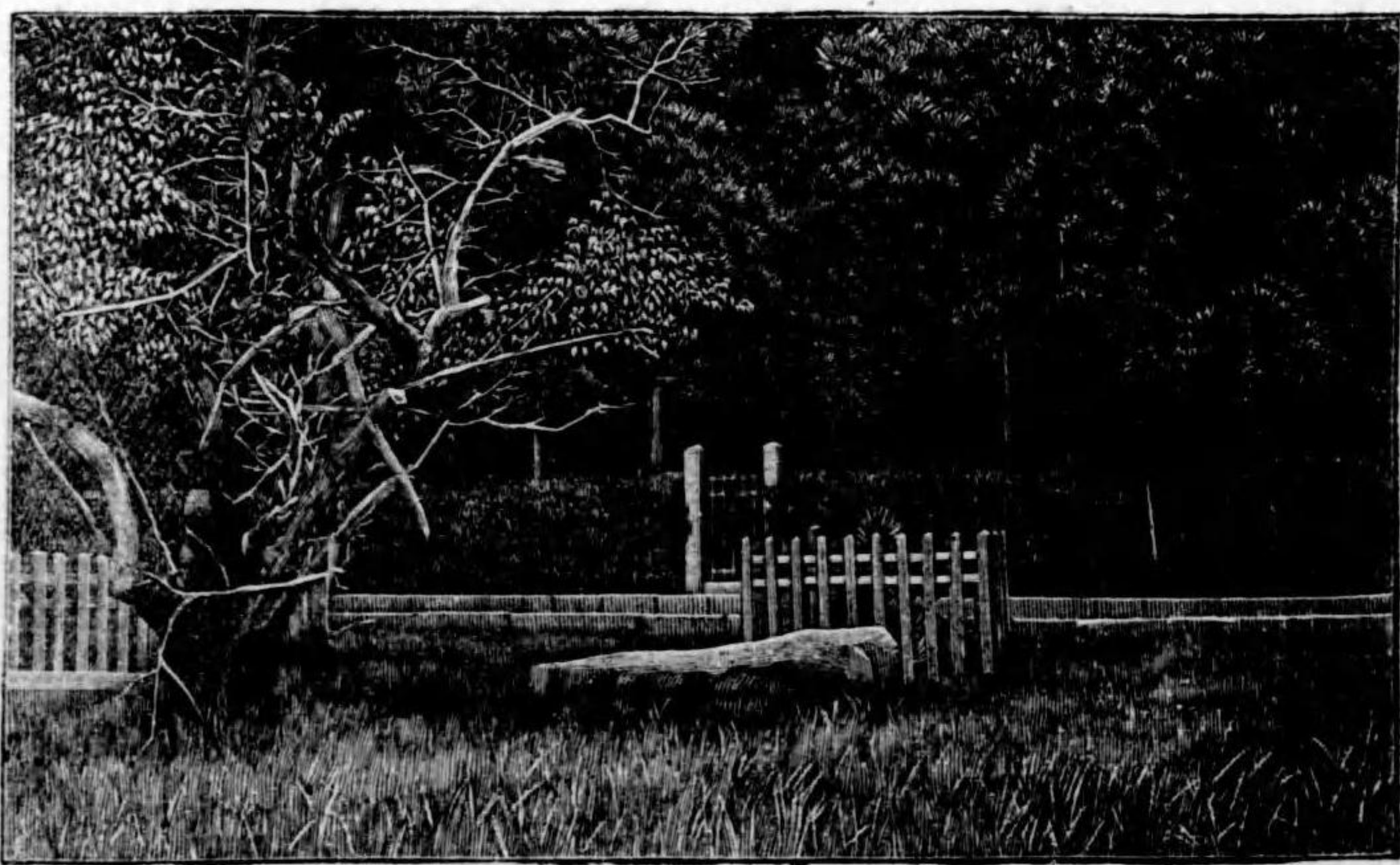
攝津國島上郡  
昆陽野。後拾  
遺集和泉式部  
「津の國のこ  
やとも人をい  
ふべきにひま  
こそなけれ葦  
の八重葦。」

藐姑射の山

莊子に「藐姑  
射之山有神  
人居焉。肌膚  
如氷雪、淖約  
若處子。」

て後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事を  
りしかば、すべて三十八年が程、この國のあるじとして萬機  
の政事を御心ひとつにをさめ、百の官をしたがへ給へりし  
その程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御有様にて、遠  
きをあはれび近きをなで給ふ御惠、雨のあしよりもしげ、  
れば、津の國のこやのひまなき政事を聞召すにも、難波の葦  
の亂れざらんことをおぼしき。藐姑射の山の峯の松もや  
うやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御す  
まひ幾春を経ても、空行く月日のかぎり知らず、のどけくお  
はしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふしに、  
今はかく花の都をさへ立別れ、おのがちりぐにさすらへ、  
磯の苦屋に軒をならべて、おのづからことゝふものとは、

浦に釣する蚤小舟、鹽焼く煙のなびく方をも、我がふる里の  
しるべにかとばかり、ながめ過さ  
せ給ふ。御すまひどもは、それま  
でと月日を限りたらむだに、明日  
知らぬ世のうしろめたさに、いと  
心細かるべし。まいて、いつをは  
てとか廻り逢ふべき限だになく、  
雲の浪、煙の波の幾重とも知らぬ  
境に、世をつくし給ふべき御様ど  
も、口惜しといふもおろかなり。  
このおはします處は、人はなれ里  
遠き島の中なり。海づらよりは少しひき入りて、山蔭にか



後鳥羽上皇隱岐仙宮址  
隱岐國中前島ノなる土海村海山(マアラムツタシ)に在り



柴のいほりの

新古今集、西行法師「いづくにも生まれずばたゞ住まであらむ柴の庵のしばしなる世に。」

二千里の外唐の白樂天の詩「三五夜中新月色、二千里外故人心。」

住江攝津國住吉郡にあり。

たそへて、大きやかなる巖のそばだてるをたよりにて、松の柱に葦葺ける廊など、けしきばかり事そぎたり。まことに柴のいほりのたゞしばしと、かりそめに見えたる御やどりなれど、さる方になまめかしく、ゆゑづきてしなさせ給へり。水無瀬殿思し出づるも夢のやうになん。はるくと見やらるゝ海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。汐風のいとこちたく吹きくるを聞召て、

我こそは新島守よ、おきの海の

あらし浪風心して吹け。

同じ世にまた住江の月や見ん、

今日こそよそにおきの島守。

年もかへりぬ。處々浦々あはれなる事をのみ思しなげく。

佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつゝ、猶さりともと思さる。隠岐には浦よりをちの遙々と霞み渡れる空をながめ入りて、過ぎにし方かきつくしおもほし出づるに、行方なき御涙のみぞとゞまらぬ。

うらやまし、長き日影の春にあひて、

汐汲むあまの袖やほすらん。

夏になりて、萱葺の軒端に五月雨の雫いと所せきも、御覽じなれぬ御心地に、さまかはりて珍しくおぼさる。

あやめふく萱が軒端に風すぎて、

しどろに落つる村雨の露。

初秋風のたちて、世の中いとゞ物悲しく露けさまさるに、いはん方なくおぼしみだる。



故郷を別路におふるくずの葉の

秋はくれどもかへる世もなし。

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方にとちひさき木の葉の浮べると見えて、漕ぎ來るを蟹の釣舟かと御覽ずるほどに、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御衾など、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文ひきあけさせ給ふより、いとみじく御胸もせきあぐる心ちすれば、やゝためらひて見給ふに、あさましくも、かくて月日經にけること、今日明日とも知らぬ命のうち、今一たびいかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなんなどいと多くみだれ書き給へるを、御顔におしあて、

垂乳根の消えやらで待つ露の身を

風よりさきにかでとはまし。

八百萬神もあはれぬ、垂乳根の

われ待ちえんと絶えぬ玉の緒。

初雁の翼につけつゝ、此處彼處よりあはれなる御消息のみ常に奉るを御覽ずるにつけても、あさましういみじき御涙のもよほしなり。家隆の二位は新古今の撰者にも召し加へられ、大方歌の道につけてむつまじく召しつかひし人なれば、夜晝戀ひ聞ゆること限なし。かの伊勢より須磨にまゐりけんも、かくやと覺ゆるまでぞ卷き重ねて書きつらねまゐらせたる。和歌所の昔の面影、かずく忘れがたうなど申して、つらき命の今日まで侍ることの恨めしきよしな

伊勢より須磨に  
六條の御息所  
伊勢より須磨  
なる源氏の君  
の許に、白き  
唐紙四五枚ば  
かりを書き續  
けたる御消息  
を奉りけるこ  
と、源氏物語  
須磨の卷に見  
ゆ。



ど、えもいはずあはれ多くて、

寢覺して聞かぬを聞きて侘しきは、

あら磯浪のあかつきのこゑ。

とあるを、法皇もいみじと思して、御袖いたくしほらせ給ふ。

浪間なきおきの小島の濱びさし、

ひさしくなりぬ、都へだてゝ。

木枯のおきの柚山吹きしをり、

あらくしをれて物思ふころ。

をりく詠ませ給へる御歌どもを書き集めて、修明門院へ

奉らせ給ふ。その中に。

水無瀬山わがふる里は荒れぬらん、

まがきは野らと人も通はで。

かざしをる人もあらばや言とはん、

おきのみ山に杉は見ゆれど。

限あればさてもたへける身のうさよ、

民のわらやに軒をならべて。

かやうのたぐひ、すべて多く聞ゆれど、さのみは年のつもり

にえなん。今また思出でば、ついでもとめてとて。

三 ふぢ衣

一 八重むぐら

その頃、いとかずまへられ給はぬふる宮おはしけり。守貞親王とぞ聞えける。高倉院第三の御子なり。隱岐の法皇



一院  
後鳥羽法皇。

の御このかみなれば、思へばやむごとくなけれど、昔後白河法皇、安徳院の筑紫へおはしましてのちに、見奉らせ給ひける御孫の宮たちえりの時、泣き給ひしによりて位にも即かせ給はざりしかば、世の中物恨めしきやうにて過し給ふ。さびしく人めまれなれば、年を経て荒れまさりつゝ、草深く八重葎のみさしかためたる宮の中に、いと心細くながめおはするに、建保の頃宮のうちの女房の夢に、冠したるもの數多参りて、劔璽を入れ奉るべきに、おのゝ用意して候はれよ。といふと見てければ、いとあやしう覺えて宮に語り聞えければ、「いかでかさほどの事あらん」と思しも寄らで、遂に御髪をさへおろし給ひて、この世の御望は絶ちはてぬる心ちして物し給へるに、このみだれ出で來て、一院の御ぞうは皆さ

北白川院  
藤原陳子。

まざまにさすらへ給ひぬれば、おのづからちひさきなど残り給へるも、世にさし放たれて、さりぬべき君もおはしまさぬにより、東よりのおきてにて、かの入道親王の御子後堀河院の御事の十になり給ふを、承久三年七月九日俄に御位に即け奉る。父の宮をば太上天皇になし奉りて、法皇と聞ゆ。いとめでたく、横さまの御さいはひおはしける宮なり。孫王にて位に即かせ給へるためし、光仁天皇より後は絶えて久しかりつるに、珍しくめでたし。その十二月一日に御即位、明くる年貞應元年正月三日御元服し給ふ。御諱茂仁と申す。御かたちもなまめかしく、あてにぞおはします。御母基家中納言のむすめ、北白川院と申しき。家實の大臣また攝政になりかへらせ給ひて、よろづおきて宣ふも、さま



さまに引きかへしたる世なりかし。

二 ありし別

その年  
寛喜三年。

まことや、その年十一月十一日阿波の院かくれさせ給ひぬ。いとあはれにはかなき御事かな。例ならず思されければ、御ぐしおろさせ給ひにけり。こゝら物をのみおぼして、今年は三十七にぞならせ給ひける。今一度都をも御覽ぜずなりぬる、いみじう悲しきを、隠岐の小島にも聞召しなげく。承明門院はさまづのうきことを見盡して、なほながらふる命のうとましきに、又かく同じ世をだに去り給ひぬる御歎のいはん方なさに、「などさきだゝぬ」と口惜しう思しこがるゝ様ことわりにも過ぎたり。かしこにて召しつかひた

女院  
承明門院。

る御調度なにくれは、かなき御手箱やうのものを都へ人のまゐらせける中に、たまさかに通ひける隠岐よりの御文、女院の御消息などをひとつにとりしたゝめたる、いみじうあはれにて、御目も霧ふたがる心ちし給ふ。家隆の二位のむすめ小宰相と聞えしは、人よりことに思ひしづみて、御服などくろう染めけり。

うしと見しありし別は藤衣

やがてきるべき門出なりけり。

三 磯のくさ

さまづめでたくもあはれにも、いろくなる都のことどもをほのかに傳へ聞召して、隠岐にはあさましの年のつも



りや」と御齡にそへて盡きせぬ御なげきぐさのみしげりそふ。慰めには思しなれにしことゝて、敷島の道にのみぞ御心をのべける。都へもたよりにつけつゝ、題をつかはし歌を召せば、あはれに忘れがたく戀ひ聞ゆる昔の人々、我も我もと奉れるをつれづれに思さるゝあまりに、みづから判じて御覽ぜられにけり。家隆の二位も、今まで生ける思ひ出でに、これをだに「とあはれにかたじけなくて、こと人々の歌をも此處よりぞとり集めて參らせける。むかしの秀能はありしみだれの後、頭おろして深くこもりゐたり。如願とぞいひける。それもこの度の御歌合に召せば、今更にそのかみの事さこそは思ひ出づらめ。例のかずくはいかでか、たゞかたはしをだにとて、

左、御製

人心うつりはてぬる花の色は

昔ながらの山の名もうし。

右、家隆の二位

なぞもかく思ひそめけん、櫻花

山としたかくなりはつるまで。

秀能

わだの原八十島かけてしるべせよ、

はるかに通ふおきのつり舟。

山家といふ題にて、また左、御製

軒端あれて誰かみなせの宿の月、

すみこしまゝの色やさびしき。

ながらの山  
大津市外長等  
山。

山とし  
古今集に「な  
げきこる山と  
し高くなりぬ  
ればつらづゑ  
のみぞまづつ  
かれける。」



右、家隆、

さびしさはまだ見ぬ島の山里を

思ひやるにもすむ心ちして。

法皇御みづから判のことばを書かせ給へるに、まだ見ぬ島を思ひやらむよりは、年久しく住みて思ひ出でんは、今少しこゝろざし深くや」とて我が御歌を勝とつけさせ給へる、いとあはれにやさしき御事をめり。

かやうのはかなしごと、又は阿彌陀佛の御勤などにまぎらはしてぞおはします。又御手習のついでに、

我ながらうとみはてぬる身の上に

涙ばかりぞ面がはりせぬ。

ふる里は入りぬる磯の草よ、たゞ

夕汐みちて見らくすくなき。

この浦にすませ給ひて、十九年ばかりにやありけん、延應元年といふ二月二十二日、六十にてかくれさせ給ひぬ。今一度都へ歸らんの御志深かりしを、遂に空しくてやみ給ひにしこと、いとかたじけなく、あはれになさけなき世も今更心うし。近き山にて例のさほふになし奉るも、むげに人づくなに心細き御有様いとあはれになん。御骨をば能茂といひし北面の入道して御供に候ひしぞ、頸にかけ奉りて都にのぼりける。

四 三神山



一 椿葉の影

阿波院の宮  
後嵯峨天皇。

さやうさく  
警策。若二策  
之警馬の意  
より出で、文  
の要所をい  
ふ。轉じて勝  
れて明敏なる  
をいふ。

さても源大納言通方の預り奉られし阿波院の宮は、おとな  
び給ふまゝに、御心ばへもいとときやうさくに、御かたちもい



後嵯峨天皇

とうるはしく、けだかくやむ  
ごとなき御有様なれば、なべ  
て世の人もいとあたらしき  
事に思ひ聞えけり。大納言  
さへ曆仁の頃失せにしかば、  
いよく眞心につかうまつ  
る人もなく、心細げにて何を待つとしもなく、かゝづらひて  
おはしますも、人わろくあぢきなう思さるべし。御母は、土  
御門の内の大員通親の御子に宰相の中將通宗とて若くて

失せにし人の御女なり。それさへかくれ給ひにしかば、幸  
相のはらからの姫君ぞ、御乳母のやうにて、憍曇彌の釋迦佛  
養ひ奉りけん心ちしておはしける。二つにて父皇に別れ  
奉り給ひしかば、御面影だに覚え給はねど、なほこの世の中  
におはすと思されしまでは、おのづから逢ひ見奉るやうも  
やなど、人知れず稚き御心にかゝりて思しわたりけるに、十  
二の御年かとよ、かくれさせ給ひぬと傳へ聞き給ひし後は、  
いよく世のうさを思しくんじつ、いとまめだちてのみ  
おはしますを、承明門院は心苦しう悲しと見奉り給ふ。  
はかなく明け暮れて、仁治二年にもなりにけり。土御門の  
宮は二十にあまり給ひぬれど、御冠のさたもなし。城興寺  
の宮僧正眞性と聞ゆる、御弟子に。とかたらひ申し給ひけれ



女院  
承明門院。

石清水の社

山城國綴喜郡  
なる男山八幡  
宮。

椿葉の影

本朝文粹、大  
江朝綱「徳是  
北辰椿葉之影  
再改、尊猶南  
面松花之色十  
廻。」

内の上  
四條天皇。

ば、さやうにもと思して、女院にもほのめかし申させ給ひけるを、「いとあるまじき事」とのみ諫め聞えさせ給ふ。その冬の頃宮いたう忍びて、石清水の社に詣でさせ給ひ、御念誦のどかにし給ひて、少しまどろませ給へるに、神殿のうちに、椿葉の影再び改る」といとあざやかにけ高き聲にてうちずんじ給ふと聞きて、御覽じあげたれば、明方の空澄みわたれるに、星の光もけざやかにて、いと神さびたり。いかに見えつる御夢ならんと、あやしく思さるれど、人にも宣はず、とまれかくもあれと愈、御學問をぞせさせ給ふ。

年もかへりぬ。春の初はおしなべて、ほどくにつけたる家々の身の祝など、心ゆきほこらしげなるに、睦月の五日より内の上例ならぬ御事にて、七日の節會にも御帳にもつかせ給はねば、いとさうくしく人々おぼしあへるに、九日の暁かくれさせ給ひぬとての、しり合へる、いとあさましともいふばかりなし。皆人あきれ惑ひて、なかく涙だにいでこず。いまだ御つぎもおはしまさず、また御はらからの宮などもわたらせ給はねば、世の中いかになり行かんずるにかとたどりあへるさまなり。さてしもやはにて、東へぞ告げやりける。

將軍  
藤原頼經。  
大殿  
藤原道家。

將軍は大殿の御子、今は大納言と聞ゆ。御後見は承久に上りたりし泰時朝臣なり。時房朝臣と一所にて、小弓射させ酒もりなどして心とけたる程なりけるに、京よりのはしり馬といへば、何事ならんと驚きながら、使召寄せて聞くに、いとあさまし。さりとしてあるべきならねば、その席よりやが



若宮の社  
鶴岡八幡宮の  
若宮。

て神事はじめて、若宮の社にて鬩をぞとりける。その程にはいとうかびたる事ども、心のひきくゝいひしろふ。「佐渡院の宮たちにや」など聞えければ、修明門院にも御心ときめきして、内々その御用意などし給ふ。承明門院ももしやなど、さまざま御祈し給ふ。あづまの使、都に入るよし聞ゆる日は、兩女院より白河に人を立て、いづ方へか参ると見せられけるぞ、理にげに今見ゆべき事なれども、物の心もとなきはさ覺ゆるわざぞかしと、例の口すげみてほほゑむ。

日ぐらし待たれて、城介義景といふもの三條河原に打出でて、承明門院のおはしますなる院はいづくぞ」とかの院より立てられたる青侍のいとあやしげなるにしも問ひければ、聞く心ち現とも覺えず、しかくと申すまゝに、土御門殿へ参りたれど、門は葎つよくかため、扉もさびつき、柱根朽ちてあかざりけるを、郎等どもにとかくせさせて、内に参りて見まはせば、庭には草深く青き苔のみむして、松風より外はこたふるものなく、人の通へる跡もなし。故通宗宰相中將の御弟を子にし給へりし定通のおとゞばかりぞ、何となくおのづからの事もやと思ひて、なえはめる烏帽子直衣にて候ひ給ひけるが、中門に出で、對面し給ふ。義景はきり戸のわきに畏りてぞ侍りける。「阿波の院の御子御位に」と申し出て出でぬ。院の中の人々、上下夢の心ちして、物にぞあたりまどひける。仁治三年正月十九日の事なり。世の人のこちち皆驚きあわて、おしかへし此方に参りつどふ馬車の



四辻殿  
修明門院の御所。

閑院殿  
先帝即ち四條天皇の皇居。

中宮の御父  
後嵯峨天皇の  
中宮藤原結子の御父實氏。

響きさわぐ世のおとなひを、四辻殿にはあさましよう、なかなか物おぼしまさるべし。又の日やがて御元服せさせ給ふ。ひきいれに左大臣實參り給ふ。理髮、頭辨定嗣つかうまつりけり。御諱邦仁、御年二十三。その夜やがて冷泉萬里小路殿へうつらせ給ひて、閑院殿より劔璽などわたさる。踐祚の儀式いとめでたし。

五 内野の雪

一 千代のみち

中宮の御父も太政大臣になり給ひて、牛車ゆり給ふ。さるべき事といひながら、いとめでたし。その頃北山の花のさ

かりに、院に奏し給ふ。その花につけて、

朽ちはつる老木に咲ける花櫻

身によそへても今日はかざゝむ。

御かへしを忘れたるこそ口惜しけれ。

かくて御即位、御禊も過ぎぬ。大嘗會の頃、信實の朝臣とい

ひし歌よみの女の少將内侍、大内の女工所にさぶらふに、雪

いみじう日ごろ降りていかめしう積りたる暁、太政大臣の

たまひつかはしける、

九重の大内山のいかならん、

限も知らずつもる雪かな。

御かへし、少將内侍、

九重の内野の雪に跡つけて、

北山  
西園寺。今の金閣寺の邊にありき。實氏の父公經建つ。

院  
後嵯峨天皇。

女工所  
大嘗會のとき臨時に設くる司。



遙に千代のみちを見るかな。

二月一日  
寶治三年。

皇后宮  
曦子内親王。  
内の上  
後深草天皇。  
宮  
皇后宮。

六 煙の末々

一 あさましの火

二月一日の夜、つねよりも九重の宮のうち人ずくなにて、おほかた夜もしづかなるに、子のときばかりに、閑院殿の二條おもての對より火いできて、棟燃え落つるほどにぞ始めて見つけたる。あさましともなのめなり。何のたどりもなく、只あわて騒ぎ、我も人もうつし心なければ、公直の中將の御とのゐに候ひけるが、車の陣なるを召して、皇后宮の御方へ寄す。内の上をば御みくしつど匣殿抱き奉らせ給ひて、宮もたてま

攝政殿  
藤原兼經。  
前の太政大臣  
藤原實氏。  
左大臣  
藤原兼平。  
内大臣  
藤原實基。  
院  
後嵯峨院。

つる。劔璽ばかりとり具して、門を急ぎ出でさせ給ふ。とばかりありて、權中納言實雄の參り給へりける車に召し移りて、春日富小路に公相の大納言のおはする家に行幸なる。そのほどにぞ、攝政殿をはじめ、前の太政大臣、左大臣、内大臣より下殘なく、人々參りつどひ給ふ。院も御車引き出で、見奉らせ給ふ。かゝるほどに、閑院殿より春日は、方は、かりありとて、院のおはします萬里小路殿へひきかへして行幸あり。夜明けはて、後、又前の太政大臣の冷泉富小路へ行幸なりて、しばし内裏になりぬ。

内の焼くることはこれをはじめにもあらず。世あがりての事はさしおきぬ。天徳四年村上のさばかりめでたかりし御代よりこの方、既に二十餘度になりぬるにや。聖の御



承元 土御門天皇の  
承元二年十一  
月。  
去年の冬  
寶治二年十一  
月二十日閑院  
の内裏の内膳  
屋焼けて神代  
より傳はれる  
釜焼けそこな  
はる。

代にしもかゝる事は侍りしかど、承元に焼けにし後は、久しく、この四十四年はなかりつるに、去年の冬御釜焼け損じて又かく打續きぬるをいとあさましう思す。何よりも帝の御車に奉りて出でさせ給へるを、いたく例なき事とかやとて人々かたぶき申す。院も驚きおぼされて、古き事ども廣く尋ねられなどすべし。

### 二 峯の秋風

太政大臣 藤原實氏。  
吹田 攝津國三島  
郡。  
川 神崎川。

また太政大臣の津の國吹田の山莊にも、いとしばしばおはしまさせて、さまゞの御遊數をつくし、いかにせんともてはやし申さる。川に臨める家なれば、秋深き月のさかりなどは殊にえんありて、門田の稻の風に靡くけしき、妻とふ鹿

院 後嵯峨院。

の聲、衣うつきぬたの音、峯の秋風、野邊の松虫、とりあつめあはれそひたる處のさまに、鶉飼などおろさせて、篝火どもともしたる川のおもて、いとめづらしうをかすと御覽ず。日頃おはしまして、人々に十首の歌召されしついでに、院の御製、

川舟のさしていづくかわがならぬ、

旅とはいはじ、宿と定めん。

と講じ上げたる程、あるじの大臣いみじう興じ給ふ。「この家のめいぼく今日に侍り」とそのたまはする。げにさる事と聞く人皆ほこらしくなん。

### 三 菊紅葉



院

後嵯峨上皇位  
を後深草天皇  
に譲りて後、  
鳥羽殿に移ら  
せ給ふ。

朝觀の行幸

主上が上皇・  
母后の宮に行  
幸なること。

通例は正月な  
れど、これは  
格別なり。

女院

後嵯峨中宮藤  
原姑子。後深  
草天皇の母  
后。

太政大臣

藤原實氏。女  
院の父。

院の上鳥羽殿におはします頃、神無月の十日頃、朝觀の行幸し給ふ。世にあるかぎりの上達部・殿上人仕うまつる。いろくの菊・紅葉をこきまぜて、いみじう面白し。女院もおはしませば、拜し奉り給ふを太政大臣見奉り給ふに、よろこびの涙ぞ人わろきほどなる。

ためしなき我が身よ、いかに年たけて

かゝるみゆきに今日仕へつる。

げに大方の世につけてだに、めでたくあらまほしき事どもを、わが御末と見給ふおとゞの心ちいかばかりなりけん。來し方もためしなきまで、高麗・唐土の錦綾をたちかさねたり。太政大臣ばかりぞねび給へれば、裏表白き綾の下襲を着給へるしも、いとめでたくなまめかし。池にはうるはし

くからのよそひしたる御船二艘漕ぎ寄せて、御遊さまゞの事どもめでたくのゝしりて歸らせ給ふ響のゆゝしさを、女院も御心ゆきて聞召す。

七 おりゐる雲

一 藤なみの影

かくて今年は暮れぬ。正月いつしか後に立ち給ふ。たゞ人の御女のかく后・國母にて立ちつゞき候ひ給へる、ためしまれにやあらん。おとゞの御さかえなめり。御子二人大臣にておはす、公相公基とて。大將にも左右にならびておはせしぞかし。これもためしいとあまたは聞えぬ事なる

正月

正嘉元年。

后

後深草天皇の  
中宮藤原公  
子。實氏の女。

たゞ人

攝政關白なら  
ぬ人。

國母

大宮院姑子。  
公子の御姉。

おとゞ

前太政大臣藤  
原實氏。



べし。我が御身太政大臣にて二人の大將を引具して、最勝講なりしかとよ、参り給へりし御勢のめでたさは、めづらかなる程にぞ侍りし。后國母の御親、帝の御祖父にて、誠にそのうつはものに足りぬと見え給へり。昔後鳥羽院に候ひし下野の君は、さる世のふるき人にて、大臣に聞えける、

藤なみの影さしならぶ三笠山

人にこえたるこずゑとぞ見る。

かへし、大臣、

思ひやれ、三笠の山の藤の花

咲きならべつゝ、見つる心を。

かゝる御家のさかえを、自らもやむごととなしと思し續けて、詠み給ひける、

三笠山  
大和國添上郡  
春日の社のあ  
る山。

春雨の四方の草木をわかねども、

しげきめぐみは我が身なりけり。

八 山のみもぢ葉

一 和歌の浦

まことや、この年頃、前内大臣基爲家の大納言・入道侍従二位行家・光俊の辨入道などうけたまはりて撰歌の沙汰ありつる、只今日明日ひろまるべしと聞ゆる、面白うめでたし。かの元久のためしとて、一院みづからみが、せ給へば、心ことに、光そひたる玉どもにぞ侍るべき。年月にそへては愈、外ざまにわくる方なく、榮えのみまさらせ給ふ御有様のいみ

この年頃  
龜山天皇の文  
永二年。

元久のため

し  
後鳥羽法皇親  
ら新古今集を  
點せさせ給  
ふ。

一院  
後嵯峨法皇。



金葉集なら  
では

金葉集には輔  
仁親王の御名  
を書かず、た  
だ三宮としる  
されたるをい  
ふ。

中務宮

宗尊親王。

じきに、この集の序にも、「日本島根はこれ我が世なり、春の風  
に徳をあふがんと願ひ、和歌の浦もまた我が國なり、秋の月  
に道をあきらめん」とかや書かせ給へりける、げにぞめでた  
きや。金葉集ならでは御子の御名のあらはれぬも侍らね  
ど、この度はかのあづまの中務宮の御なのりぞ、書かれ給は  
ざりける。いとやむごとなし。新古今の時ありしかばに  
や、竟宴といふこと行はせ給ふ。いと面白かりき。この集  
をば續古今と申すなり。

九 北野の雪

一 枯野の眞葛

右近の馬場  
一條京極の  
末。

雪のいみじう降りたるあした、右近の馬場の方御覽じにお  
はしまして、詠ませ給ひける、

なほたのむ、北野の雪の朝ぼらけ、

跡なきことにうづもるゝ身は。

親王

宗尊親王。

枯野の眞葛

續古今集に  
「日影さす枯  
野の眞葛霜と  
けて過ぎにし  
秋にかへる霜  
かな。」

など聞えき。大方この親王の歌の聖にておはします事、皆  
人の口に侍るべし。「枯野の眞葛霜とけて」なども人ごとに  
めでのゝしる御歌なるべし。されば、世をみだらむなど思  
ひ寄りけるものゝふの、この親王の御歌すぐれて詠ませ給  
ふを、夜晝いとむつまじく仕うまつりける程に、おのづから  
同じ心なるものなど多くなりて、宮のみけしきあるやうに  
言ひなしけりとかや。



二 秋の雨

一院後嵯峨院。  
 新院後深草院。  
 大宮院後嵯峨中宮姑子。  
 東二條院後深草中宮公子。  
 一つ御方二條富小路殿  
 本院後嵯峨院。  
 中宮龜山中宮嬪子後に今出川院と申す。子なし。  
 公經  
 實氏  
 公相  
 實兼今出川院嬪子(龜山中宮)實雄  
 京極院信子(龜山皇后)

秋の雨、ひごろ降りていと所せかりしに、たま〜雲間見え  
 て空のけしきものすごきほどに、一院・新院・大宮院・東二條院  
 など皆ひとつ御方におはします。御前に太政大臣公相・常  
 磐井入道殿實氏もさぶらひ給ふ。前の左の大臣實雄・久我  
 大納言雅忠などうとからぬ人々ばかりにて、大御酒まゐる。  
 あまた下りながれて上下少し打亂れ給へるに、太政大臣本  
 院の御盃を賜はり給ひて、もちながらとばかりやすらひて、  
 「公相、官位共に極め侍りぬ。中宮今出川院さておはしませば、も  
 し皇子降誕もあらば、家門の榮華衰ふべからず。實兼もけ  
 しうは侍らぬをのこなり。うしろめたくも思ひ侍らぬに、  
 一のうれへ心の底になん侍る」と申し給へば、人々「何事にか」

入道相國  
 公相の父實氏。この年文永四年十月十二日、公相父に先たちて薨ず。  
 恨の至りて  
 本朝文粹後  
 江相公、爲亡  
 息澄明、四十  
 九日願文、「弟  
 子朝綱敬白、  
 悲之又悲、莫  
 レ悲レ於レ老後  
 レ子、恨而更  
 恨、莫レ恨レ於  
 少先レ親。」

と覺束なくおぼす。左の大臣實雄は、中宮の御事かくのたまふを、「いでや」と耳にとまりて打思さるらんかし。一院、何事にか」と宣ふに、しばしありて、「入道相國にいかにも先立ちぬべき心ちなんし侍る。恨の至りてうらめしきは、さかりにて親に先立つうらみ、悲の至りてかなしきは、老いて子に後るゝには過ぎず」とこそ澄明におくれたる願文にも書きて侍りしかなど申し給ひて打ちしほたれ給へば、皆いとあはれに聞きおぼす。入道殿はまして墨染の御袖ぬらし給ひける、ことわりなりかし。

一〇 あすか川



むくり  
蒙古  
御賀  
後醍醐院五十  
の御賀

一 峯のもみぢ葉  
かやうに聞ゆる程にむくりの軍といふ事起りて御賀と  
まりぬ。人々口をしく本意なしとおぼすこと限なし。何  
事もうちさましたるやうにて、御修法やなにやと公家武家  
たゞこのさわぎなり。されども程なくしづまりていとめ  
でたし。

今上  
龜山天皇。  
若宮  
後宇多天皇。  
六月二十六  
日  
文永五年。  
入道殿  
實氏。  
故大臣  
公相。  
中宮  
嬉子。

かくて今上の若宮六月二十六日親王の宣旨ありて、同じき  
八月二十五日坊に居給ひぬ。かく花やかなるにつけても  
入道殿はあさましく思さる。故大臣の先立ち給ひしなげ  
きに沈みてのみ物し給へど、かゝる世のけしきをかしこく  
見給はぬよ」とおぼしなくさむ。中宮は御服の後も参り給  
はず。よろづひきかへ物うらめしげなる世の中なり。

御本意  
御出家の御素  
志。  
白河殿  
山城國愛宕  
郡。

飛鳥川  
大和國高市郡  
稻瀨山に發し  
磯城郡初瀬川  
に合す。

一院は御本意遂げ給はんことをやうくおぼす。その年  
の九月十三夜白河殿にて月御覽ずるに上達部殿上人例の  
おほく参りつどふ。御歌合ありしかば内の女房ども召さ  
れて、いろくの引物源氏五十四帖のこゝろさまの風  
流にして上達部殿上人までも分ち賜はず。院の御製、  
われのみや影もかはらん、飛鳥川

かねてより袖もしぐれて、墨染の  
ゆふべいろます峯のもみぢ葉。

この御歌にてぞ御本意の事おぼしきだめけりと皆人袖を  
しぼりて聲もかはりけり。あはれにこそ。民部卿入道爲  
家判せさせられけるにも、身をせめ心をくだきてかきやる



龜山殿

山城國葛野郡

新院

後深草院

白菊

表白菊蘇芳

青紅葉

表青裏黃

北野

山城國葛野郡

平野

同上

中務の親王

宗尊親王

中將

實冬

方も侍らずと、かや奏しけり。

かくて神無月の五日龜山殿へ御幸なる。今日をかぎりの御旅なれば心ことにとゝのへさせ給ふ。新院も例のおはします。大宮東二條ひとつ御車にておなじく渡らせ給ふ。大宮女院は白菊の御衣、東二條院は青紅葉の八、菊の御小袿たてまつる。まづ北野平野の社へ御まゐりあれば、御隨身ども花を折りつくし、今日をかぎりと同様あしきまでさうぞきあへり。兩社にて馬あげさせられけり。神もいかに名残おほく見給ひけん。空さへうちしぐれて木の葉さそふ嵐も折知顔に物悲しう涙あらそふ心ちし給ふ人々多かるべし。中務の親王「今日のたもとさぞしぐるらん」とのたまひし御かへし、中將、

袖ぬらす今日をいつかと思ふにも

しぐれてつらき神無月かな。

やがてその夜御ぐしおろし給ひぬ。御戒の師には青蓮院の法親王まゐり給ふ。

二 草まくら

一 うるほふ袖

本院は猶いとあやしかりける御身の宿世を人の思ふらん事もすさまじう思しむすぼゝれて、世をそむかんのまうけにて尊號をもかへし奉らせ給へば、兵仗をもとゝめんとて御隨身ども召して祿かづけ暇賜はするほど、いと心細しと

本院  
後深草院。  
御身の宿世  
文永十一年正月二十六日龜山天皇讓位後宇多天皇踐祚。後深草院の御子孫の皇位を繼ぎ給はぬを宿世ありとなり。

青蓮院の法親王  
尊助親王。



故院  
後嵯峨院。  
東の御方  
後深草院の妃  
権子、伏見天  
皇の御母。

思ひ合へり。大方の有様うち思ひ廻らすもいと忍び難き事多くて内外の人々袖どもうるひわたる。院もいと哀なる御けしきにて心づよからず。今年三十三にぞおはします。故院の四十九にて御ぐしおろし給ひしをだに、さこそは誰もく惜み聞えしか。東の御方もおくれ聞えじと御心づかひし給ふ。さならぬ女房上達部の中にもとりわきむつまじうつかまつる人三四人ばかり、御供つかまつるべき用意すめれば、ほどくにつけて私も物心細う思ひ歎く家々あるべし。

かゝる事どもあづまにも聞え驚きて、例の陣のさだめなどやうにこれかれ數多武士ども寄り合ひ寄り合ひ評定しけり。この頃はありし時頼朝臣の子時宗相模守といふぞ世

の中はからふぬしなりける。故時頼朝臣は康元元年に頭おろして後、しのびて諸國を修行しありきけり。それも國の有様人の愁など、委しくあなぐり見聞かんのはかりごとにてぞありける。あやし宿りに立寄りてはその家ぬ



北條時頼  
(京都萬壽寺藏)

しが有様を問ひ聞き、理ある愁などの埋もれたるを聞きひらきては、我はあやしき身なれど昔よろしき主をもち奉りて、いまだ世

にやおはすると消息奉らん。もてまうで、聞え給へ。などいへば、なでふ事なき修行者の何ばかりかは、とは思ひながら、言ひ合せてその文もちてあづまへ行きて、しかとと教



へしまゝに言ひて見れば、入道殿の御消息なりけり。「あな  
かまく」とて永き愁なきやうにはからひつ。佛神などの  
現れ給へるかとして皆額をつきて悦びけり。かやうの事す



北條時宗  
(肥後滿願寺藏)

べて數知らずありしほ  
どに國々も心づかひを  
のみしけり。最明寺入  
道とぞいひける。

その子なればにや今の  
時宗朝臣もいとめでたきものにて、本院のかく世を思し捨  
てんずる、いとかたじけなく哀なる御事なり。故院の御お  
きては様こそあらめなれど、そこらの御このかみにてさせ  
る御あやまりもおはしまさゞらん、いかでかは忽ちに名殘

本院  
後深草院。  
故院  
後嵯峨院。

新院  
龜山院。

十一月五日  
建治元年。

なくはものし給ふべき。いとたいくしきわざなり」とて  
新院へも奏し、彼方此方なだめ申して、東の御方の若宮を坊  
に立て奉りぬ。十一月五日節會行はれていとめでたし。  
かゝれば少し御心なぐさめて、この際はしひてそむかせ給  
ふべき御道心にもあらねば、思しとゞまりぬ。これぞある  
べき事とあいなう世の人も思ひいふべし。

三 老のなみ

一 花の白雪

三月の末つ方、持明院殿の花盛に新院わたり給ふ。鞠のか  
かり御覽ぜんとなりければ、御前の花は梢も庭もさかりな

三月  
後宇多天皇弘  
安二年。  
持明院殿  
上立賣の北、  
新町の西。



新院  
龜山院。  
故院  
後嵯峨院。  
本院  
後深草院。  
朱雀院  
三條の北、朱  
雀の西。

るに、よその櫻をさへ召してちらし添へられたり。いと深  
うつもりたる花の白雪、跡つけがたう見ゆ。上達部殿上人  
いと多く参り集り、御隨身北面の下藤などいみじうきらめ  
きて候ひ合へり。わざとならぬ袖口もおし出されて、心  
ことに引きつくるはる。寢殿の母屋に御座まじ對座に設けら  
れたるを新院入らせ給ひて、故院の御時定めおかれしうへ  
は、今更にやはとて長押の下へひきさげさせ給ふほどに、本  
院出で給ひて、朱雀院の行幸にあるまじの座をこそなほさ  
れ侍りけるに、今日の御幸には御座をおろさるゝいとこと  
やうに侍りなど聞え給ふほどいと面白し。うべくしき  
御物語はすこしにて、花の興にうつりぬ。  
御かはらせなどよき程の後、春宮伏見院 おはしまして、かゝり

まらうどの  
院  
龜山院。  
したうづ  
下ぐつ。磯。  
久我の太政  
大臣  
通光。  
樺櫻  
表蘇芳、裏赤  
花。  
山吹  
表薄朽葉、裏  
黄。

の下に皆立出で給ふ。兩院春宮立たせ給ふ。半過ぐるほ  
どに、まらうどの院のぼり給ひて御したうづなどなほさる  
るほどに、女房別當の君また上藤だつ久我の太政大臣のう  
まごとかや樺櫻の七、紅のうち衣、山吹のうはぎ、赤色の唐衣、  
すゞしの袴にて、しろがねの盃、柳筥にすゑて、同じひさげに  
て柿ひたしまるらすれば、はかなき御たはぶれなど宣ふ。  
暮れかゝる程、風すこし打吹きて花もみだりがはしく散り  
まがふに、御鞠數多くあがる。人々の心ちいとえんなり。  
ゆゑある木蔭に立ちやすらひ給へる院の御かたちいとき  
よらにめでたし。春宮もいと若ううつくしげにて、濃き紫  
の浮織物の御指貫なよびかにけしきばかり引きあげ給へ  
れば、花のいと白く散りかゝりて、紋のやうに見えたるもを



かし。御覽じあげて一枝おし折り給へるほど、繪にかゝまほしき夕ばえどもなり。その後も御みきなどらうがはしきまで聞召しさうどきつゝ、夜更けて歸らせ給ふ。

二 かみ風

その頃 弘安四年。  
内 後宇多天皇。  
春宮 伏見天皇。  
西大寺 奈良の西にあり。  
大般若 六百卷。唐玄奘譯。  
その頃蒙古おこるとかやいひて世の中さわぎ立ちぬ。いろいろさまゞに恐しう聞ゆれば、本院・新院はあづまへ御下りあるべし。内・春宮は京にわたらせ給ひて東の武士ども上り候ふべし。など沙汰ありて、山々寺々御祈數知らず。伊勢の勅使に經任大納言まゐる。新院も八幡へ御幸なりて西大寺の長老召されて眞讀の大般若供養せらる。大神宮へ御願に、我が御代にしもかゝる亂出で來て、誠にこの日

大宮院 姑子。

本のそこなはるべくは御命を召すべきよし御手づから書かせ給ひけるを、大宮院いとあさましき事なり。と、なほ諫め聞えさせ給ふぞことわりにあはれなる。東にも言ひ知らぬ祈どもこちたくののしる。故院の御代にも御賀の試樂の頃かゝる大事ありしかど、程なくこそしづまりにしを、この度はい



龜山山上皇銅像

とにがくしう躒状とかやもちて參れる人などありて、わづらはしう聞ゆれば、上下思ひ惑ふこと限なし。されども七月一日夥しき大風吹きて異國の船六萬艘、兵乘



りて筑紫へよりたる、皆吹き破られぬれば、或は水に沈み、おのづから残れるも泣くく、本國へ歸りにけり。石清水の社にて大般若供養説法いみじかりける刻限に、晴れたる空に黒雲一むら俄に見えてたなびく。かの雲の中より白き羽にてはぎたるかぶら矢の大なる、西を指して飛び出で、鳴る音おびたゞしかりければ、彼處には大風の吹きくると兵の耳には聞えて、浪荒く立ち、海の上あさましくなりて皆沈みにけりとぞ。なほ我が國に神のおはします事あらたに侍りけるにこそ。さて爲氏の大納言伊勢の勅使にてのぼる道より申しおくりける、

勅をしていのるしるしの神風に

寄せくる浪ぞかつくだけつる。

かくて静まりぬれば、京にも東にも御心どもおちゐて、めでたさかぎりなし。かの異國の帝心うしとおぼして湯水をも召さず、われいかにもしてこの度日本の帝王にうまれて、かの國をほろぼす身とならん。とぞちかひて死に給ひけるとぞ聞き侍りし。まことにやありけん。

一三 今日の日影

一 窓のほたる

この中將才かしこくて、末の世にはことの外にもてなされて、まづ一品してしばしおはせし頃、御百首の歌に、

位山のぼりはてゝも峯におふる

中將  
源有房。  
位山  
飛騨國。



松にこゝろをなほのこすかな。

さてつひに内大臣までのぼられき。さて嘉元のころか  
よ、百首歌奉りし中に、

あつめこし窓の螢の光もて

おもひしよりも身をてらすかな。

と詠まれ侍りき。有房と聞えしが若くての世のことなる  
べし。

一四 つげの小櫛

一 秋ぎりの空

かくて又の年春の頃より東二條院御惱日々におもり給ひ

又の年  
嘉元二年  
東二條院  
後深草中宮藤  
原公子。

伏見殿  
山城國紀伊  
郡。

法皇  
後深草院、

御孫の春宮  
花園天皇。

て今はと見えさせ給へば、伏見殿へ出でさせ給ひて、遂にう  
せさせ給ひぬ。七十にあまらせ給へば、ことわりの御事な  
り。法皇もその御なげきの後をさく物聞召さずなどあ  
りしをはじめにて、打續き心よからず御わらはやみなど聞  
ゆる程に、七月十六日二條富小路殿にてかくれさせ給ひぬ。  
六十二にぞならせ給ひける。いとあはれに悲しき事ども  
いへば更なり。御孫の春宮もひとつにおはしましつれば、  
急ぎて外へ行啓なりぬ。御修法の壇どもこぼくと毀ち  
て、くづれ出づる法師ばらのけしきまで、今をかぎりにとち  
めはつる世の有様いとかなし。宵過ぐるほどに六波羅の  
貞顯・憲時二人御とぶらひに参れり。京極おもての門の前  
に床子にしりかけてさぶらふ。随ふものども左右になみ



深草殿  
山城國紀伊郡

院  
伏見院

遊義門院  
後宇多院皇后  
始子

よとゝもの  
涙

古今集、貫之「よとゝもの」流れてぞ行く涙川冬もこぼらぬ水泡なりけり。」

みたるさまいとよそほしげなり。

又の日夜に入りて深草殿へゐてわたし奉る。御車さしよせて御くわん乗せ奉るほど、うちとよみ合ひたるいとことわりに、心をさむる人もなし。院の御前宮だちなど藁履とかやいふもの奉りて門まで御送つかうまつらせ給ひて、とみにもえのぼらせ給はず、御直衣の袖をおしあて、遙に程經てぞ御車にたてまつりて伏見殿への御おくりもせさせ給ひける。院のうちゆゝしきまで泣き合へり。後深草院とぞ聞ゆる。御日數のほどは伏見殿に宮たち遊義門院などおはします。秋さへ深くなり行くまゝに「よとゝもの」御涙ひる間なくおぼしまどふ。遊義門院、物をのみ思ひねざめにつくぐと

みるも悲しきともし火の色。

春きてしかすみの衣ほさぬまに

こゝろもくるゝ秋ぎりの空。

二 つたもみち

院の二の御子の御母、忠繼の宰相のむすめ、今は准后と聞ゆる御腹におはします。この頃帥の宮と聞ゆるを法皇とりわけ御傍さらずならはし奉り給ひて、いみじうらうたがり聞えさせ給ひしかば、人より殊におぼし歎くべし。頃さへしぐれがちなる空のけしきに、山の木の葉も涙あらそふ心ちしていとかなし。處がらしもいとあはれをそへたり。川浪のひゞき、となせの瀧の音までもとり集めたる御心の

院の二の御子  
後醍醐天皇  
御母  
藤原忠子。後宇多院典侍。  
法皇  
龜山院。嘉元三年九月十五日崩御。  
となせの瀧  
大井川の上流にありて龜山殿より程近し。



内親王  
御子。

中どもなり。御日數のほどは帥の宮ひとつ御腹の内親王  
などもこの院におはしますほどつれづれなるまゝにはか  
なし事など聞えかはして、花紅葉につけてもむつまじくな  
れ聞え給ふべし。

大多勝院  
龜山殿の中に  
あり。

帥の御子は大多勝院の西の廂にわたらせ給ふ。御前の松  
の木に這ひかゝれる蔦の紅葉のいたう染めこがしたるを  
とりて、長月三十日の夕つ方昭訓門院の御方へ奉らせ給ふ。  
あすよりの時雨もまたで染めてけり、

袖のなみだや蔦のもみぢ葉。

木の葉よりもろき御涙はましていとゞせきかね給へりし。  
御かへし、

よもは皆涙の色に染めてけり、

昭訓門院  
龜山院の御妃  
藤原英子。

そらにはぬれぬ秋のもみぢ葉。

あはれに見奉らせ給ひつゝ、名残もいみじくながめられて、  
高欄におしかゝり給へる夕ばえの御かたちいとめでたし。  
ありつる紅葉を西園寺大納言公顯のとのゐ所へつかはす。  
雨とふるなみだの色やこれならん、

袖より外にそむるもみぢ葉。

女院の御せうとなれば、しめやかなる御山ずみの心苦しさに  
さぶらひ給ふなりけり。御返事、  
いくしほか涙の色こそめつらん、

今日をかぎりの秋のもみぢ葉。

時雨はしたなく風あらゝかに吹きて暮れぬれば、宮うちに  
入り給ひて、御殿油ちかくめして、晝御覽じさしたる御經な

女院  
英子。



ど讀み給ふほどに、若殿上人ども打連れてこなたの御との  
ゐに参れり。晝の蔦の葉のちりほひたるを人々見るに、宮  
「それにおのゝ歌書きて」と宣へば、中將爲藤朝臣、  
もみぢ葉になくねはたえず、空蟬の

からくれなるも涙とや見ん。

清忠朝臣、

山姫の涙の色もこのごろは

わきてやそむる蔦のもみぢ葉。

光忠朝臣、

世の中のなげきの色をしらねばや、

こぞにかはらぬ蔦のもみぢ葉。

これらをととりあつめて北殿の内親王の御方へ奉らせ給ひ

ければ、

さすがなほ色は木の葉に残りけり、

かたみもかなし秋の別路。

雨うちそゝぎてけはひあはれなる夜いたう更けて、帥の宮  
例の北殿へ参り給へれば、姫宮も御殿ごもりぬ。候ふ人々  
も皆しづまりぬるにや、格子などたゝかせ給へどあくる人  
もなければ、空しく歸らせ給ふとて、書きてさしはさませ給  
ふ。

おのづから眺めやすらむとばかりに

あくがれきつるありあけの月。

御かへし、この日、

いたづらに待つよひすぎし村雨は



おもひぞたえし、ありあけの月。

一五 うら千鳥

一 むなしき名

院の上さばかり和歌の道に御名たかくいみじくおはしま  
せば、いかばかりかと思されしかども、正應に撰者どもの事  
ゆゑに煩どもありて撰集もなかりしかば、いとゞ口惜しう  
思されて、

我が世にはあつめぬ和歌の浦千鳥、

むなしき名をやあとに残さん。

など詠ませおはしましたりしを、「今だに」と急ぎたゞせ給ひ

院の上  
伏見院。  
正應に  
爲兼卿謀反の  
きこえありと  
て、關東より  
の沙汰にて佐  
渡へ洗され、  
御門もやがて  
御讓位ありし  
をいふ。

行成大納言  
攝政伊尹の  
孫。道風・佐  
理と共に書を  
以て三賢と稱  
せらる。

て、爲兼の大納言うけたまはりて、萬葉よりこなたの歌ども  
集められき。正和元年三月二十八日奏せらる。玉葉集と  
ぞいふなる。

この爲兼の大納言は爲氏の大納言の弟に爲教右兵衛督と  
いひしが子なり。かぎりなき院の御おぼえの人にて、かく  
撰者にもさだまりにけり。そねむ人々多かりしかど、さは  
らんやは。この院の上好みよませ給ふ御歌の姿は、前藤大  
納言爲世の心地にはかはりてなんありける。御手もいと  
めでたく、むかしの行成大納言にもまさり給へるなど時の  
人申しけり。やさしうも強うも書かせおはしましけりと  
かや。



一六 秋のみ山

一 かたぶく月

院 後宇多院。  
 内 後醍醐天皇。  
 上 後宇多院。  
 萩の戸 清涼殿夜の御殿の北にありて、二間に一間なり。又菊の戸ともいへり。  
 春日の御神 春日大明神の神靈のやどります神。

院にも内にもあさまつりごとのひまには、御歌合のみしげう聞えし中に、元亨元年八月十五夜かとよ、常より殊に月おもしろかりしに、上萩の戸に出でさせ給ひて、ことなる御遊などもあらまほしげなる夜なれど、春日の御神うつし殿におはします頃にて、絲竹のしらべは折悪しければ、例の只内内御歌合あるべしとて、侍従の中納言爲藤召されて、俄かに題たてまつる。殿上に候ふかぎり左右同じほどの歌よみをえらせ給ふ。左内の上、春宮大夫公賢、左衛門督公敏、侍従中納言爲藤、中宮權大夫師賢、宰相惟繼、昭訓門院の春日爲世、女右は藤大納言爲世、富小路大納言實教、洞院中納言季雄、公修

筆蹟

除日折紙進 覽之候關東任人許任レ之候也兼又僧官所望之輩追到來注進之候と恐惶謹言  
 十二月廿九日 尊治  
 安福殿 承明門内の西にありて、春興殿と相對す。  
 無名門 殿上の間より小板敷を下り紫宸殿に至る土廊にあり。  
 右近の陣 校書殿と安福殿との間なる月華門の中にあり。

宰相・實任少將・内侍爲佐女忠定朝臣爲冬忠守  
 などいふ醫師もこの道のすきものなりとて召し加へらる。衛士のたく火も月の名だてにやとて、安福殿へ渡らせ給ふ。忠定中將晝の御座の御はかしをとりて參る。殿上のかみの戸を出でさせ給ひて、無名門より右近の陣の前を過ぎさせ給へば、

除日折紙進  
 後醍醐天皇御筆  
 尊治

(寶墨徵史) 筆宸御皇天醐醍後



遣水に月のうつれるいとおもしろし。

安福殿の釣殿に床子立て、東面におはします。上達部は

簀子の高欄にせなかおし  
あてつゝ、殿上人は庭に候  
ひ合へるもいとえんなり。  
池の御船さしよせて左右  
の講師隆資爲冬乗せらる。  
御みきなどまるるさまも、  
うるはしきことよりは艶  
になまめかし。人々の歌  
いたくけしきばみて、とみ  
照る月なみもくもりなき



後醍醐天皇 山城大徳寺藏

照る月なみ  
源順「水の上  
にてる月なみ  
をかぞふれば  
今宵ぞ秋のも  
なかなりけ  
る。」

にも奉らず。いと心もとなし。

池の鏡に、いはねどしるき秋のなかば、げにいとことなる空  
のけしきに、月もかたぶきぬ。明方ちかうなりにけり。う  
への御製、

鐘の音も傾く月にかこたれて、

をしと思ふ夜はこよひなり鳧。

と講じあげたるほど、景陽の鐘もひゞきをそへたる折柄、い  
みじうなん。いづれもけしうはあらぬ歌ども多く聞えし  
が、御製の鐘の音にまされるはなかりしにや。かくて今年  
もまたくれぬ。

景陽の鐘  
時の鐘。景陽  
はもと支那南  
齊武帝の宮中  
にありし鐘樓  
の名。

一七 春のわかれ



長月ばかり  
正中元年九月  
十九日。

一 いかならん時

その頃長月ばかりまだしのゝめの程に、世の中いみじくさ  
わぎのゝしる。「何事にか」と聞けば、美濃國の兵にて土岐の  
十郎とかや、また多治見の藏人などいふ者ども忍びのぼり  
て、四條わたりに立ちやどりたる事ありて、人にかくれてを  
りけるを、早う又告げ知らするものありければ、俄かにその  
所へ六波羅より押寄せて搦め捕るなりけり。あらはれぬ  
とや思ひけん、かのものどもはやがて腹切りつ。又別當資  
朝藏人内記俊基同じやうに武家へとられて、きびしくたづ  
ねとひ守りさわぐ。事のおこりは御門世をみだり給はん  
とて、かの武士どもを召したるなりとぞいひあつかふめる。  
さてその宣旨なしたる人々として、この二人をもあづまへ下

御門  
後醍醐天皇。

故院  
後宇多院。

正應にも  
伏見天皇正應  
三年三月九日  
浅原爲頼とい  
へる武士禁中  
に濫入せるを  
いふ。

していましむべしとぞ聞ゆる。いかさまなる事の出でく  
べきにかと、いとおそろしくむづかし。「故院おはしまし、  
程は世も長閑にめでたかりしを、いつしかかやうの事ども  
出できぬるよ」と人の口やすからざるべし。正應にも浅原  
といひしさわぎは、後嵯峨院の御そうぶんを東よりひき違  
へし御恨とこそは聞えしか。今もその御憤の名残なるべ  
し。過ぎにし頃資朝も山伏のまねびして、柿の衣にあやゐ  
笠といふもの着て、東の方へ忍びて下れりしは、少しはあや  
しかりし事なり。はやうかゝる事どもにつけてあなたざ  
まにも宣旨をうくるものゝありけるなめり。俊基も「紀伊  
國へゆあみに下る」などいひなして、田舎ありきしげかりし  
も、今ぞ皆人思ひ合せける。



さるまゝには言ひ知らず聞ゆる事どもあれば、まだきにいと口惜しう思されて、この事をまづおだしくやめんとおぼせば、かの正應にありしやうなるちかひの御消息をつかはす。宣房の中納言御使にてあづまに下る。大かた古き御世よりつかへきて年もたけたる上、この頃は天下にいさぎよくうべくしき人に思はれたる頃なれば、この事更に御門のしろし召さぬよしなどけざやかに言ひなすに、荒きえびすどもの心にもいと忝き事となごみて、無異なるべく奏しけり。この御使の賞にや宣房大納言になされぬ。いといみじき幸なり。親は三位ばかりにて入道してき。子どもなどさへいと清げにてあまたあめり。さればおほやけはしろし召されぬにても、かの人々は遁るべき方なしとて、

親資通。

別當は佐渡國へ流されぬ。俊基はいかにして遁れぬるにか都にかへりぬれど、ありしやうには出でつかへず、籠り居たるよしなり。かやうにて事なく静まりぬれば、いとめでたけれど、上の御心のうちは猶安からず、いかならむ時とのみおもほしわたるべし。

一八 むら時雨

一 闇のうつゝ

つゝむとすれど事廣くなり、にければ武家にも早う漏れ聞えて、「さにこそあなれ」と用意す。「まづ九重をきびしくかため申すべし」などさだめけり。かくいふは元弘元年八月二



本殿  
常の御所にて  
清涼殿なり。

中宮  
禧子。

二條院の昔  
平治の亂に、  
二條天皇、後  
白河上皇信賴  
の爲に幽閉せ  
られ給ひし  
を、經宗・惟方  
等相謀りて、  
天皇に女房の  
裝束を召させ  
奉り、あやし  
き車に乗せ奉  
りて、藻壁門  
より忍び出だ  
し奉りしをい  
ふ。

十四日なり。雜務の日なれば記録所におはしまして、人の争ひうれふる事どもを行ひくらさせ給ひて、人々もまかで、君も本殿にしばし打休ませ給へるに、今夜既に武士どもきほひ參るべし」と忍びて奏する人ありければ、とりあへず雲の上を出でさせ給ふ。中宮の御方へ渡らせ給ひても、しめやかにあらず、いとあわたし。かねて思し設けぬにはあらねども、事のさかさまなるやうになりぬれば、よろづうきく」と我も人もあきれたり。内侍所神璽寶劔ばかりをぞ忍びてみて渡らせ給ふ。うへはなよらかなる御直衣たてまつり、北の對よりやつれたる女車のさまにてしのび出でさせ給ふ。かの二條院の昔もかくやと思ひ出でらる。日頃の御用意にはまづ六波羅を攻められんまぎれに、山へ

法親王たち  
尊雲・尊澄の  
二皇子。  
坂本  
近江國滋賀郡  
比叡山の麓に  
あり。  
中務の宮  
尊良親王。

闇のうつゝ  
古今集「うづ  
玉の闇のうつ  
つはさやかな  
る夢にいくら  
もまさらざり  
けり。」

行幸ありて、彼處へつはものどもを召して、山の衆徒をも相具し、君の御かためとせらるべし」と定められければ、かの法親王たちもその御心して坂本に待ち聞え給ひけれど、今はかやうに事違ひぬればあへなしとて、俄かに道をかへて奈良の京へぞ赴かせ給ふ。中務の宮も御馬にて追ひて參り給ふ。九條わたりまで御車にて、それより御門もかりの御衣にやつれさせ給ひて、御馬にたてまつるほど、こはいかにしつる事ぞ」と夢の心ちしておぼさる。御供に按察大納言公俊・萬里小路中納言藤房・源中納言具行・四條中納言隆資などまわれり。いづれもあやしき姿にまぎらはして、暗き道をたどりおはするほど、げに「闇のうつゝ」の心ちして、我にもあらぬさまなり。



木幡山 山城國宇治郡 宇治の北方にあり。  
 木津 山城國相樂郡。  
 東南院 奈良にあり。僧正は聖尋、關白基忠の子。  
 鷲峰山 山城國相樂郡和東郷。  
 笠置寺 山城國相樂郡。

丑三ばかりに木幡山過ぎさせ給ふ。いとむくつけし。木津といふわたりに御馬とめて、東南院の僧正のもとへ御消息つかはす。それより御輿を參らせたるに奉りて、奈良へおはしましたつきぬ。こゝに中一日ありて二十七日わづかの鷲峰山へ行幸ありけれども、其處もさるべくやなかりけん、笠置寺といふ山寺へ入らせ給ひぬ。「所のさまたやすく人の通ひぬべきやうもなく、よろしかるべし」とて、木丸殿のかまへを始めらる。これよりぞ人々すこし心ち取靜めて、近き國々の兵ども召しに遣す。

二 ありあけの月

坂本には行幸を待ち聞え給ひけるに引きたがへ、南さまへ

筆蹟

今度所願令成就者於二丹生明神之寶前二以二二禪侶一可始二長日不斷之護摩一且如レ舊可レ尊二入法佛法紹隆一仍所立願二狀如レ件元弘貳年十二月廿五日二品親王花押

おはしましぬればその由衆徒に聞かれなばあしかりぬべし。又とまれかくまれまことのおはします所をさうなく武家へ知らせじ。のたばかりにやありけん、花山院の大納言師賢を山へつかはして、忍びて御門のおはします由にもてないて、かの兩法親王事行ひ給ひつゝ、六波羅のつはものどものかこみを防がせ給ふ。その日は大納言も大塔の前座主の宮もうるはしきも

(寶墨徵史) 蹟筆王親良護



妙法院の宮  
尊澄法親王。

のふ姿にいでたせ給ふ。卯花緘の鎧に鍬形の兜たてまつり、大矢負ひてぞおはする。妙法院の宮はすゞしの御衣の下に萌黄の腹巻とかや着給へり。大納言はからの香染の薄物の狩衣にけちえんに赤き腹巻をすかして、さすがに巻繪の細太刀をぞ佩き給ひける。

六波羅より、御門こゝにおはしますと心得て武士ども多くまゐり圍む。山法師も戦ひなどして、海東とかやいふつはもの討たれにけり。「事のはじめに東失せぬるめでたし」などぞいふめる。かゝれども御門笠置におはしますよし程なく聞えぬれば、謀られ奉りにけり。とて、山の衆徒もせうせう心がはりしぬ。宮々も逃げ出で給ひて笠置へぞまうで給ひける。大納言は都へまぎれおはすとて夜深く志賀の

志賀の浦  
近江國志賀郡。

浦を過ぎ給ふに、有明の月隈なく澄みわたりて寄せ返る浪の音もさびしきに、松吹く風の身にしみたるさへとりあつめ心細し。

思ふ事なくてぞ見まし、ほのくと

ありあけの月の志賀の浦波。

その後辛うじてぞ笠置へは辿り参られける。かやうの事ども、例のはや馬にてあづまへ告げやりぬ。

三 思はぬ山の紅葉

笠置殿には大和河内伊賀伊勢などより兵ども参りつどふ中に、事の始より頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛くすくよかなるものにて、河内國におのが館



筆蹟  
祈禱卷數賜了  
種々御祈念返  
々爲悦候恐  
々謹言  
十二月九日  
左衛門少尉  
正成花押  
謹上金剛寺三  
綱御返事

のあたりをいかめしくしたゝめて、このおはします所もし  
危からん折は行幸をもな  
し聞えんなど用意しけり。  
あづまのえびすども、や  
うく攻め上るよし聞ゆ。  
もとより京にある武士ど  
も、我先にときほひ参る。  
木丸殿にはさこそいへむ  
ねくしきものなし。「い  
かになり行くべきにか」と  
いと心細く思し亂る。我  
が御心もての御事なればかこつ方なけれど、故郷の空もあ

新禱卷の教賜  
種々御祈念返  
々爲悦候恐  
々謹言  
十二月九日  
左衛門少尉  
正成花押  
謹上金剛寺三  
綱御返事

吾懐の心は  
昔々金丸殿  
と人聞き三返事

(寶墨徵史) 蹟筆成正木楠

はれに思し出でらる。秋も深くなり行くまゝに、山の木の  
葉のうちしぐれ、谷の嵐のおとづるゝも、あだのきほふかと  
肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心ちし給ふも  
あぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて、

思はぬ山のみちをぞ見る。

既にあづまの武士ども雲霞のいきほひを棚曳かし上るよ  
し聞ゆれば、笠置にもいみじう思しさわぐ。もとよりいと  
嶮しき山のつゝらをりを、えも言はず木戸逆茂木・石弓など  
いふ事どもしたゝめらる。さりともたやすくは破れじと  
頼ませ給へるに、後の山より御かたきども崩れ参りて、木戸  
ども焼き拂ひ、おはしますあたり近く既に煙もかゝりけれ



座主の法親王  
尊澄法親王。

ば、今はいかにせんにて、あやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いとほかなげなる御有様なり。



中務の御子大塔の宮などは、かねてより此處を出でさせ給ひて、楠木が館におはしましけり。行幸も其方さまにやと思しこゝろざして、藤房具行兩中納言、師賢の大納言入道手をと리카はしてほのほの中を免れ出づる程の心ちども、夢とだに思ひも分かず、いとあさまし。少しのびさせ給ひてぞ、御馬たづね出で、君ばかりたてまつりぬれど、習はぬ山路に御心ちもそこなはれて、誠にあや

多賀の山  
山城國綴喜郡。

宇治  
山城國久世郡。

ふく見えさせ給へば、多賀の山といふわたりにしはし御心ちをためらふ所に、山城國の民にて深須の五郎入道とかいふもの参りかゝりて、案内聞えたるしもいとめざましう口惜し。上達部思ひやる方なくて、只目を見か、はして、いかにまにせむとあきれたるに、東より上れる大將軍にて陸奥國の守貞直といふもの大勢にて参れり。今はたゞともかくも宣はすべきやうなければ、遂にかひなくて、敵の爲に御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはします程に、心うしといふものめなり。具行・藤房・忠顯少將など、やがておのが手のものどもに隨へさせつ。大納言入道御馬のしりに走りおくれて、此處彼處の



岩かげ木のもとに休みつゝ、とかくためらふ程に、それも見つけられてとられぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事の由六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり。かくいふは九月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに涙もよほし顔なり。平等院の紅葉御覽じやらるゝも、かゝらぬ行幸ならばとあへなし。後冷泉院かとよ、此處に行幸し給ひて三四日おはしましける、その世の人の心ち上下何事かはとうらやましくあはれに思さる。

十月三日都へ入らせ給ふも思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衛府のすけの心ちして御輿近く打圍みたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋ひだやには、もとより兩院春宮おはし

兩院

後伏見院・花園院。

春宮

量仁親王。

ませば、南の板屋のいとあやしきに御しつらひなどしておはしまさずも、いとほしうかたじけなし。間近き程によろづ聞召し御覽じふるゝ事ごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらん。口惜しう思し亂る。ならはぬ御やどりに時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬ板屋の軒の村時雨、

音を聞くにも濡るゝ袖かな。

一九 久米のさら山

一 この宿

かの承久のためしにとや、あづまよりの御使にて長井の右



馬助高冬といふものなるべし、これは頼朝の大將の時より鎌倉に重きものゝふにて、いまだ若けれどもかゝる大事なものぼせけるとぞ申しける。遂に隱岐國へうつし奉るべしとて、三月の初の七日に都を出でさせ給ふ。今はと聞召す御心惑どもいへば更なり、所々のなげき近うつかうまつりし人々の心地どもおき所なく悲し。御門もかぎりなく御心惱むべし。いとかうしも人に見えじとかつは思し静むれど、あやにくにすゝみ出づる御涙をもてかくしつゝおはします。ふりにし事を思し出づるにも、立ちかへり復世をやすく思さむことのいとかたければ、よろづ今をとぢめにこそと思し廻らすに、人やりならず口惜しきちぎり加はりける前の世のみぞ盡きせずうらめしき。

つひにかく沈み果つべき報あらば、

上なき身とはなに生れけん。

故院  
後宇多院。

北山  
山城國葛野  
郡

巳の時ばかりに出でさせ給ふ。網代の御車に御前どもなどは、故院の御世より仕う奉りなれにしものどもあるかぎり参れり。御車寄に西園寺中納言公重さぶらひ給ふ。うへは御冠に世のつねの御直衣指貫白綾の御衣一襲たてまつれり。去年の今日は北山にて花の宴せさせ給ひしも哀に思し出でられて、その日の事かきつらねこひしく思さる。人々の祿にこそは賜はせしを、今日は御旅衣にたちかふるも、哀にさだめなき世のならひ、今更こゝろうし。御車にたてまつるとて、日頃おはしましつる傍の障子に書きつけさせ給ふ。



いさ知らず、尙うき方の又もあらば、  
この宿とても偲ばれやせん。

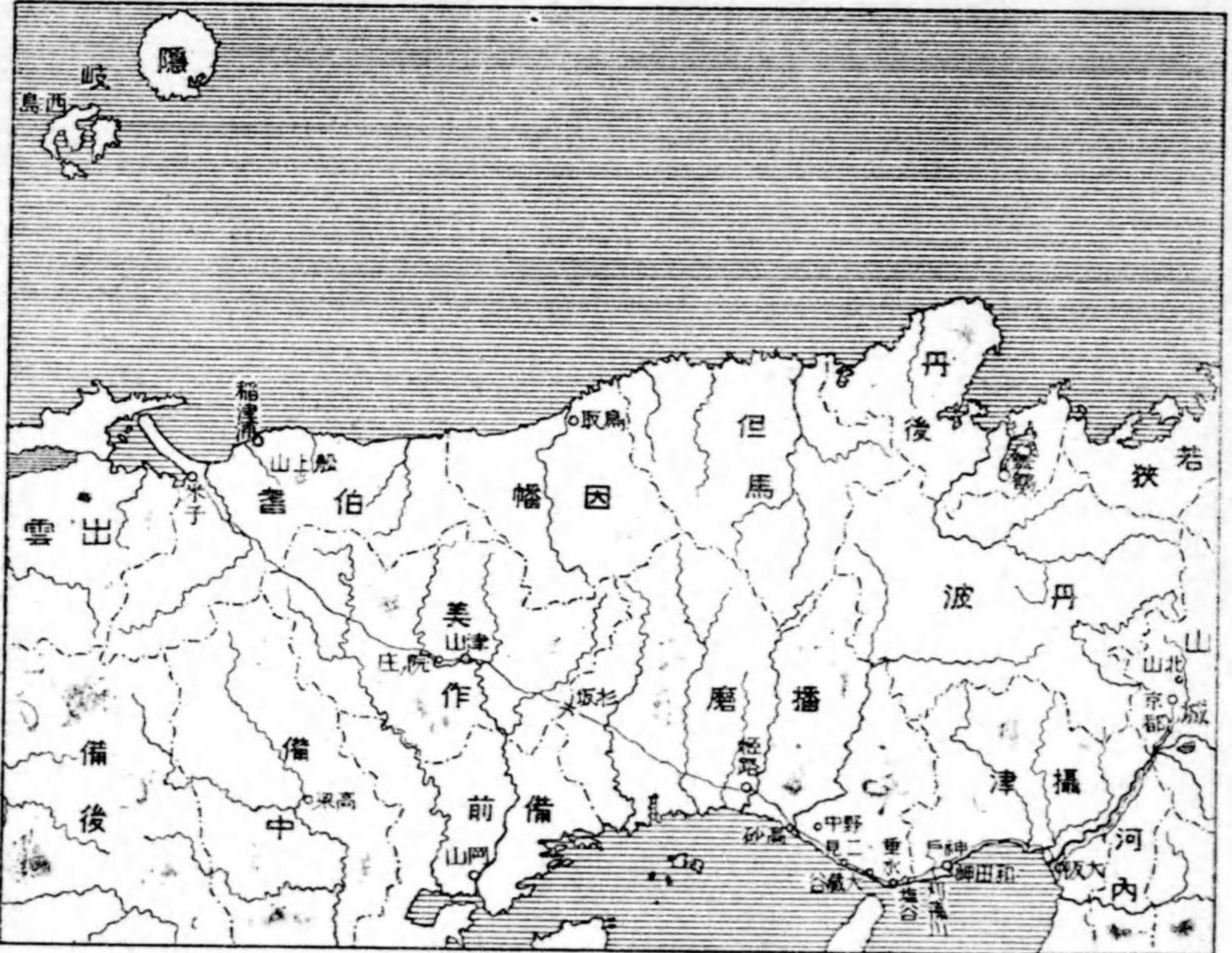
### 二水の泡

御門は和田の岬、菟藻川を打渡して須磨の關にかゝらせ給ふ。かの行平の中納言「關ふきこゆる」と言ひけんは、浦よりをちなるべし。あはれに御覽じわたさる。源氏の大将の「鳴く音にまがふ」とのたまひけん浦波、いまもげに御袖にかかるこゝちするも、さまざま御涙のもよほしなり。播磨國につかせ給ひて、鹽屋・垂水といふ所をかしきを問はせ給へば、「さなん」と奏するに、「名を聞くよりからき道にこそ」と宣はせて、さしのぞかせ給へる御さまかたち、ふりがたくなまめ

和田の岬  
攝津國兵庫より南出せる角。  
菟藻川  
同國志田郡。  
須磨  
同國八田郡。  
ふきこゆる  
旅人は袂すゞしくなりにけり、關吹きこゆる須磨の浦風。  
鳴く音にまがふ  
源氏物語「とひわびて鳴く音にまがふ浦波は思ふかたより風や吹くらん。」  
鹽屋・垂水  
共に播磨國明石郡。

大藏谷  
今の明石。

島がくれ行く船  
古今集、人麿「ほのく」と明石の浦の朝霧に島がくれ行く船をしぞ思ふ。」



かし。けぢかき限は、あはれにめでたうもと思ひ聞ゆべし。大藏谷といふ所少し過ぐるほどにぞ人磨のつかはありける。明石の浦を過ぎさせ給ふに、島がくれ行く船どもほのかに見えてあはれなり。  
水の泡の  
消えてうき世を  
わたる身の



野中の清水  
播磨國明石  
郡。  
二見の浦  
同國加古郡。  
高砂の松  
同國同郡。

うらやましきは蟹のつり舟。

野中の清水二見の浦高砂の松など名ある所々御覽じわた  
さるゝも、かゝらぬ御幸ならばをかしうもありぬべけれど、  
よろづかきくらす御みだり心地に御目とまらぬも、我なが  
らいたうくんじにけるかなと思さる。いと高き山の峰に  
花おもしろく咲きつゞきて、白雲をわけ行くこゝちするも  
艶なるに、都のこと數々思し出でらる。

花はなほうき世もわかず咲きてけり、

みやこも今やさかりなるらん。

あと見ゆる道のしをりの櫻花、

この山人のなさけをぞ知る。

三 花のこずゑ

十七日美作國におはしましつきぬ。御心地なやましくて  
この國に二三日やすらはせ給ふほど、かりそめの御宿りな  
れば物深からで、候ふかぎりの武士どもおのづからけちか  
く見奉るを、あはれにめでたしと思ひ聞ゆ。君もおもほし  
つゞくる事ありて、

あはれとはなれも見ららん、我が民を

おもふこゝろは今もかはらず。

おはしますに、續きたる軒のつまより煙の立ちくれば、いほ  
りにたける」と打誦せさせ給へるもえんなり。  
よそにのみ思ひぞやりし、思ひきや

いほりにた  
ける  
源氏物語「山  
がつの庵にた  
けるしばく  
もことゝひこ  
なんこふる里  
人。」



民のかまどをかくて見んとは。

雲清寺  
不詳。

二十二日、雲清寺といふ所にていとおもしろき花を折りて、  
忠顯少將奏しける、

かはらぬを形見となして咲く花の

みやこはなほも思ばれにける。

御かへし、

色も香もかはらぬしもぞうかりける、

みやこの外の花のこずゑは。

又小山の五郎とかいふ武士に同じ花をやるとて、少將、

うき旅と思ひははてじ、一枝の

花のなさけのかゝる折には。

かくてなほおはしませば、來し方はそこはかとなく霞みわ

たりて、あはれに遠くもきにけるかなと、日數にそへて都の  
いとゞへだゞりはつるも心細う思さる。ほのかに咲きそ  
むと見えし花の梢さへ、日數も山も重なるにそへてうつろ  
ひまさりつゝ、上り下るつゝらをりにいと白く散りつもり  
て、むらぎえたる雪の心地す。

花の春また見んことの難きかな、

同じ道をばゆきかへるとも。

いとかたしとは思すものから、猶さりともしたひらかにあら  
ば、おのづから御本意遂ぐるやうもありなんなど、御心もて  
慰め思すもはかなし。

四 あられの音



御いもひ  
便。御いみの音

隠岐の小島には、月日経るまゝにいと忍びがたう思さるゝ  
事のみぞかず添ひける。いかばかりのおこたりにてかゝ  
るうきめを見るらむと、前の世のみつらく思し知らるゝに  
も、いかでその事をも報いてんと思して、うちたえて御いも  
ひにて、朝夕つとめ行はせ給ふ。法のしるしをもこゝろみ  
がてらと、かつは思すなるべし。みづから護摩などもたか  
せ給ふに、いとたのもしき事夢にも多くなんありける。  
つれづれに思さるゝをりくは、廊めく所に立出でさせ給  
ひて、遙かに浦の方を御覽じやるに、蟹の釣船ほのかに見え  
て秋の木の葉のうかべる心地するもあはれに、いづくをさ  
してかと思さる。  
こゝろざすかたを問はゞや、浪の上に

浮きてたゞよふ蟹の釣舟。

浦漕ぐ船の  
續古今集、小  
町「須磨の海  
上の浦漕ぐ船  
のかちを絶え  
よるべき身  
ぞかなしかり  
ける。」

京には  
光嚴院。

彼處  
隠岐。

「浦漕ぐ船のかちを絶え」と打誦じて、御涙のこぼるゝをあと  
なくまぎらはし給へる、いふよしなく心深げなり。ねび給  
ひにたれど、なまめかしうをかしき御さまなれば、所につい  
てはましてやんごとなきあたらしさを、自らいとかたじけ  
なしと思さる。

京には十月になりて御禊・大嘗會などのいそぎに天の下物  
さわがしう、内藏寮・内匠寮・打殿・染殿・何くれの道々につけて  
かしがましう響き合ひたるも、片つ方は涙のもよほしなり。  
悠紀・主基の御屏風の歌人々に召さる。書くべきものゝな  
ければ、彼處へまゐれる行房中將をや召還されましなど定  
めかね給ふを、まだきに傳へ聞召しければ、よひの間の静な



るに、御前にことに人もなく、この朝臣ばかり侍ひて、昔今の御物語のたまふついでに、都にいふなる事はいかゞあらんとすらん。さもあらばいとこそ美しからめ。と打仰せられて、火をつくととながめさせたまへる御まみの、忍ぶとすれどいたうしぐれさせ給へるを見奉るに、中將も心づよからずいとかなし。いかばかりの道ならば、かゝる御ありさまを見おき聞えながら、うきふる里にはいかで歸らむと思ふも、え聞えやらず。後夜の御行にさながらおはしませば、潮風いとたかう吹きくるに、霞の音さへ堪へがたく聞えて、いみじう寒き夜の氷をうち叩きて、闕伽たてまつるも、山寺の小法師ばらなどのこゝちぞするや。少將この中將など、梯折りて參れるも、いつならひてかと哀に御覽せらる。今

一度いかで世を御心にまかするわざもがなと、人の心のけぢめわかるゝにつけても、深う思しまさる事のみ數知らず。

## 二〇 月草の花

### 一 なぎさの氷

かの島には春來てもなほ浦風冴えて浪荒く、渚の氷もとけがたき世のけしきに、いとゞ思しむすぼるゝ事盡きせず。かすかに心細き御すまひに年さへ隔りぬるよと、あさましく思さる。候ふ人々もしばしこそあれ、いみじくくんにけり。今年は正慶二年といふ。閏二月あり。後の如月の初つ方より、とりわきて密教の秘法を試みさせ給へば、夜も大殿ごもらぬ日數經て、さすがにいたう困じ給ひにけり。



さめよらましを

古今集、小町「思ひつゝぬればや人の見えつらん夢と知りせばさめざらましを。」源氏の大將源氏物語明石の巻に出づ。

心ならずまどろませ給へる曉方夢うつゝともわかぬ程に、後宇多院ありしなからの御面影さやかに見え給ひて、聞えしらせ給ふこと多かりけり。打驚きて夢なりけりとおほすれど、いはむ方なく名残かなし。御涙もせきあへず、さめざらましをと思すもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけん夢の心地し給ふも、いと哀にたのもしう、いよく御心強さまさりて、かの新發意が御迎のやうなる釣舟もたより出できなんやと、待たるゝ心地し給ふに、大塔の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふこと絶えず。都にもなほ世の中しづまりかねたるさまに聞ゆれば、よろづに思しなぐさめて、關守の打寝るひまをのみうかひ給ふに、しかるべき時の到れるにや、御垣守に候ふつはものど

筆蹟

富山深依、奉<sub>二</sub>憑入<sub>一</sub>候<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>進<sub>二</sub>福賢<sub>一</sub>候<sub>二</sub>之處<sub>一</sub>御不審尤本望候就<sub>二</sub>其當<sub>一</sub>所之路次肝要候歟、没落輩候者可被<sub>二</sub>召捕<sub>一</sub>候公私日出候委細之旨但馬公令<sub>二</sub>申候<sub>一</sub>恐々謹言八月十三日伯耆守長年花押謹上鞍馬寺衆徒御中

も、御氣色をほの心得て、靡き仕うまつらんと思ふ心つきにければ、さるべきかぎり語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりてかくろへゐて奉る。いとあやしげなる海上の釣舟のさまに見せて、夜深き空の暗きまぎれに押出す。折しも霧いみじうふりて行く先も見えず、いかさまならんと

富山深依、奉<sub>二</sub>憑入<sub>一</sub>候<sub>二</sub>使者<sub>一</sub>進<sub>二</sub>福賢<sub>一</sub>候<sub>二</sub>之處<sub>一</sub>御不審尤本望候就<sub>二</sub>其當<sub>一</sub>所之路次肝要候歟、没落輩候者可被<sub>二</sub>召捕<sub>一</sub>候公私日出候委細之旨但馬公令<sub>二</sub>申候<sub>一</sub>恐々謹言八月十三日伯耆守長年花押謹上鞍馬寺衆徒御中

(寶墨微史) 蹟筆年長和名



あやふけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹き、すみて、その日の申の時に、出雲國に着かせまたひぬ。こゝにてぞ人々心ちしづめける。

稻津浦

八橋郡

おなじ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へ遷らせ給へり。この國に名和の又太郎長年といひて、あやしき民なれどいと猛に富めるが、類ひろく心もさかくしくむねしくしきものあり。かれがもとへ宣旨を遣し給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢にて御迎にまゐれり。又の日賀茂の社といふ所に立入らせ給ふ。都の御社思し出でられていとたのもし。それより船上寺といふ所へおはしませて、九重の宮になずらふ。これよりぞ國國のつはものどもに御敵をほろぼすべきよしの宣旨つか

船上寺

八橋郡の船上山か西伯郡の大山か、一書に船上山大山寺とあり。

はしける。比叡の山へものぼらせられけり。

前の守

佐々木清高

かくて隠岐には、出でさせ給ひにし晝つ方より騒ぎ合ひて、隠岐の前の守追ひて参るよし聞ゆれば、いとむくつけく思されつれど、此處にもその心していみじう戦ひければ、引返しにけり。京にも東にも驚き騒ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこの武士ども彼處に集ひをるに、かかる事さへ添ひにたれば、いよく東よりも上り集ふめり。

二かへる波

さて都には伯耆よりの還御とて世の中ひしめく。まづ東寺へ入らせ給ひて、事ども定めらる。二條の前の大臣平道めしありて参り給へり。こたみ内裏へ入らせ給ふべき儀重

東寺

東都下京區九條町



祚などにもあるべけれども、璽しの箱を御身にそへられたれば、只遠き行幸の還御の儀式にてあるべきよし定めらる。關白をおかるまじければ、二條の大臣氏長者を宣下せられて、都の事管領あるべきよしうけたまはる。天の下只この御はからひなるべしとて、このひとつあたり喜び合へり。六月六日東寺より常の行幸のさまにて内裏へぞ入らせ給ひける。めでたしとも言の葉なし。去年の春いみじかりしはやと思し出づるも、たとしへなし。今も御供の武士どもありしよりはなほ幾重ともなく打圍み奉れるはいとむくつけきさまなれど、こたみはうとましくも見えず、たのもしくてめでたき御守かなと覺ゆるもうちつけめなるべし。世のならひ時につけて移る心なれば、皆さぞあるらし。先

陣は二條富小路の内裏に着かせ給ひぬれど、後陣の兵はなほ東寺の門まで續きひかへたりきとぞ聞えしは、まことにやありけん。正成もつかうまつれり。

かの名和の又太郎は伯耆守になりて、それも衛府のものどもに打ちまじりたる、めづらしくさまかはりてゆすりみちたる世の氣色かくもありけるを、などあさましくは歎かせ奉りたりけるにかと、めでたきにつけても、猶前の世のみぞゆかしき。車など立續きたるさまありし御くだりにはこよなくまされり。物見ける人の中に、  
昔だにしづむうらみをおきの海に

波たちかへる今ぞかしこき。

むかしの事など思ひ合するにやありけん、金剛山なりし東



禮成門院  
禧子。

の武士ども、さながら頭を垂れて参りきほふさま、漢のはじめもかくやと見えたり。禮成門院も又中宮と聞えさす。六日の夜やがて内裏へ入らせ給ふ。いにし年御ぐしおろしにき。御惱なほおこたらねば、いつしか五壇の御修法はじめらる。八日より議定行はせ給ふ。昔の人々のこりなく参りつどふ。十三日大塔の法親王都に入り給ふ。この月頃に御ぐしおほして、えも言はずきよらかなる男になり給へり。からの赤地の錦の御鎧直垂といふもの奉りて、御馬にてわたり給へば、御供にゆゝしげなるものゝふども打圍みて、御門の御供なりしにもほとく劣るまじかめり。速かに將軍の宣旨をかうぶり給ひぬ。流されし人々程なくきほひのぼるさま、枯れ

父の大納言  
宣房。

にし草木の春にあへる心ちす。その中に季房の宰相入道のみぞ、預なりけるものゝ情なき心ばへやありけん、東のひしめきのまぎれに失ひてければ、兄の中納言藤房は歸り上れるにつけても、父の大納言母の尼上など歎つきせず、胸あかぬ心地してけり。四條中納言隆資といふも頭おろしたりし、また髪おほしぬ。もとより塵を出づるにはあらず、かたきの爲に身を隠さむとてかりそめに剃りしばかりなれば、今はた更に眉をひらく時になりて、男になれらん、何のはかりかあらん。とぞ同じ心なるどち言ひ合せける。天台座主にていませし法親王だにかくおはしませば、まいてとぞ。誰にかありけん、その頃聞きし、



墨染の色をかへつ、月草の

うつればかはる花のころもに。

増鏡鈔本終

増鏡鈔本

大正六年三月七日印刷  
大正六年三月十日發行

定價金三拾二錢  
大正六年度臨時定價金三拾四錢

編者

吉田彌平

東京市小石川區高田老松町五十二番地

發行者

上原才一郎

東京市神田區裏神保町六番地

發行所

光風館書店

(電話本局二千三十九番)  
振替口座東京三二七番

東京市神田區裏神保町六番地

印刷者

四海民藏



本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に  
賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

東京秀英舎第一工場印刷



終

